

スコットランド啓蒙期の主要学・協会、クラブについて——付・関連刊本及び MSS. リスト——

川 原 和 子*

ま え が き

貧困な後進国でしかなかった18世紀スコットランドから、突如として（のように見える）、産業、学問、文化のあらゆる領域で爆発的なエネルギーが噴出した。活動の舞台は、政治、経済、法律、医学、農業、工業、技術のみならず、建築、都市計画、大学、博物館、植物園などの文化インフラ、百科辞典の編集、雑誌の刊行、そして学・協会、クラブ活動と、生活領域のすべてにわたっていた。そして、“エディンバラの街角に佇めば、たちまちのうちに50人もの天才、学者を掴まえることができる”と、同時代人のウィリアム・スメリーが豪語するほど多数の、すぐれた学者、文人の群を輩出したのである。ウォルター・バジョットがアダム・スミスを評して、“野蛮人〔の状態〕から、立ち上ってみたらスコットランド人になった”（... from being a savage, man rose to be a Scotchman.）と言ったというが、まさにこの時代全体の評言としても適切なのではなかろうか。そして又、この時代の、歴史の舞台からの消え去り方がユニークであった。この時代の生んだ巨人たちの死を超えることができなかったのは止むを得ないとしても、“他の国では啓蒙は、名誉ある記憶と多くの論争をあとに曳きながら次第に昏れていったのに、スコットランドでは、“バン”と激しい音をたてて立ち去った。そして申し合わせたように、それきり忘れられてしまった”¹⁾。

近年、この時代をひとくくりにして、「スコットランド啓蒙期」と呼び、内外の研究者の強い関心を惹きつけている。時代の巨人スミスの経済学や、ヒュームの哲学等に関する個別研究の分野では、従来、多大の研究成果が蓄積されてきたのは言うまでもないが、啓蒙期全体を視野に入れた研究が開始したのは、たかだか20数年のことに過ぎない。むしろ、これからが本格的な研究期に入るのであろう。

啓蒙の時期を何時から何時までと見るか、研究者によって一定しないが、おおよそ

*かわはら かずこ 三重大学非常勤講師

1730年前後から、aftermath までふくめれば1820年頃までと考えてもよいのではないであろうか。最盛期が'60年～'90年とする点ではほぼ一致している。しかし始めと終わりについてはバラつきがある。1707年の合邦 (the Union) 以後とする人もいるし、終わりはウォルター・スコットの死 (1832) で区切る人もいる。デヴィッド・ダイチズ (David Daiches) は啓蒙期を1730—1790と見るが、啓蒙の終わりを19世紀にまで持ち込むのは、この世紀とつづく25年間は変化が激しく多様な時代だから、単一の文化的運動の時代と規定するのには無理がある²⁾、としている。又、次のように言う。 “ナポレオン戦争の霧が晴れると世界はウォルター・スコットとコクバーン卿と、エディンバラ・リヴュー [第2期] の時代になった。この時代は18世紀後半のリテラティに多くを負っているし、文学でも批評の分野でも出色の時代でもあるが、前世紀のさまざまな思想家たちが共有していた、協調と改良という偉大な統合的理想を失ってしまった。”³⁾と。

本稿でとり上げた学・協会、クラブに関連して言えば、王立学会となって現代まで存続しているものを除けば、大半が18世紀末までに消滅しているから、時期的には問題ないのだが、一つボーダー・ラインにあるのは Friday Club (1803年立) である。このクラブは、啓蒙の文人に含めるのが疑問視されているスコットが、第2期エディンバラ・リヴューを始めたフランシス・ジェフリヤ、シドニー・スミスと共に創った会である。会員には、まさに、啓蒙中枢世代のデュガルド・ステュアート、ジョン・ミラー、ジョン・ブレイフェアがいたし、少し若いところで、ヘンリー・マッケンジーやトマス・ブラウンも入っていた。ヘンリー・ブルームも会員であったが、彼は啓蒙期の下限と言われている人物である。フライデイ・クラブはやはり、啓蒙末期のクラブと言うべきではなかろうか。

啓蒙活動が展開された主な地域は、東のエディンバラから西のグラスゴウに至るローランド (Lowland) のベルト地帯で、北限はアパディーンである。これより以北はジャコバイトの本拠地であった。啓蒙の下支えとなった改良運動 (Improvements) のうち、中心となった農業改良は、主としてハイランド地方を対象として、産業・工芸技術改良はローランド中心に行なわれた。

啓蒙期書誌研究の一環として、学・協会、クラブをとり上げた経緯については、後ほど触れさせていただくが⁴⁾、書誌の分量のわりに解題部分がふくれ上がってしまった。一つには、地味なテーマであるため、小史概要のみでは無味乾燥になりがちなので、多少アネクドット風の記述を加えたこと、二つ目は、本誌の読者の便宜を考えて、専門研究者にはなくもがなの注記—とくに人物に関する注記を多くしたためである。いま少し啓蒙期人脈の概括を述べておくと、まず啓蒙思想の中核として道徳哲学派 (ハチスン (Francis Hutcheson, 1694—1746)、ヒューム (David Hume, 1711—1776)、

スミス (Adam Smith, 1723—1790), バトラー (Joseph Butler, 1692—1725) ら) がある。次に常識哲学派 (Common-sense school, これが主流多数派を占める。トマス・リード, ジェームズ・ビーティ, デュガルド・ステュアート, トマス・ブラウン, ウィリアム・ハミルトン [以上本文], オズワルド (James Oswald, 1727—1793))。穏健中立派 (モデレーツ (Moderates) と称し, 牧師, とくにスコットランド教会の牧師が多い, 主流の一つと言ってよい。アダム・ファergusン, ジョージ・ターンブル, ケームズ卿, ロバート・ウォーレス [以上本文]) などがある。ハチスン は, 周知のようにスミスの師で, 「啓蒙の父」と言われる人物である。その著 “Inquiry into the original of our ideas of beauty and virtue” が1724年にグラスゴウで刊行されたことを以てスコットランド啓蒙が始まった, とされている。しかし, ハチスンは本稿のクラブには全く登場していない。オズワルド, バトラーも出て来ない。あとの人々は, 大抵いくつかかけもちでクラブに入っているし, スミスなどは同時にではないとしても6つもの会員になっている。啓蒙準備期(導入期), ヨーロッパ, アメリカとの交流もふくめれば, 触れるべき人物は多いが, 本稿とは直接関連がないので割愛する。関連のある限りでは本文に含めた。これら多数の, さまざまな専門, 職業の人々が—多くは学者, リテラーティ (literati=啓蒙期文人, 知識人) ではあったが—一堂に会し, 飲食を共にしながら (convivial club と呼ばれる), あたかも “兄弟が親類同志のような親密さ” をもって多岐のテーマについて談論風発し, しかも, クラブの多くは数10年にもわたって続いたという現象は, 恐らくスコットランド啓蒙期を除いては, 史上皆無に近いであらう。

- 1) Davie, George E.: The Scottish Enlightenment. London, 1981. p.31.
- 2) Daiches, David, Peter Jones and Jean Jones, eds.: A hotbed of genius: The Scottish Enlightenment 1730—1790. Edinburgh, 1986. p.1.
- 3) *ibid.*, p. 40.
- 4) 学協会, クラブの書誌作成の契機はいくつかある。1976年秋から1年間, 私は文部省の在外研修員として, ハーヴァード大学のクレス・ライブラリで研修中であつた。この間に, クレスや, ハーヴァードのワイドナー・ライブラリ (Widener は中央図書館) を始めとして北東部の大図書館には意外にスコットランド刊本が多いことに気が付いた。とくにプリンストン大の貴重書部で顕著であつた。キュレーターの説明では初期の学長がスコットランド人だったから, ということであつたが, この時は私はまだ John Witherspoon (第6代学長) を知らなかつた。第2に, クレスの, フォクスウェルが集めたバンフレット・コレクションの中に (周知のように, クレスのコア・コレクションは, ケンブリッジ大学でアルフレッド・マーシャルの同僚であつた Foxwell (H.S.) が収集したものである) ‘Scots Society in Norwich’ (1755年立) の出版物を7点発見した。その一つ ‘An Account of ……」と題するこの会の小史に “John Dalrymple [Sir John …… 1726—1810, 1784年頃 Solicitor to the Board of Exchequer, と推定] が1775年に会計を担当, James Anderson はもっとも熱心な会員の1人であつた” との記述があり, フライリーフに, フォクスウェルの自筆で ‘very rare, the only reference to the Society I have

ever seen' Foxwell note June, 1932 と認められていた。Scots Society は、一種の改良団体と言ってもよいが、救貧組織である。(当時、スコットランドの改良運動の結果—それだけが原因ではないが—農村に大量の離農者—とくに借地人の—が出現し、新興産業に吸収されるまでに至らなかったため、都市に流入して多くは浮浪者となっていた)。これがきっかけとなって、さらに多くの、啓蒙期改良団体の資料が見つかったのである。

第3に、この頃刊行された Chitnis, Anand C.: *The Scottish Enlightenment. A social history.* London, 1976. を読み、チトニスを紹介してさらに、McElroy, Davis D.: *Scotland's age of improvement — A survey of eighteenth century literary clubs and Societies.* Washington State Univ. 1969 [エディンバラ大学位論文1952年を補筆改訂したもの]を読んだ。この段階ではまだ 'Enlightenment' という用語は使用されていない。社会史的研究であるが、原文献を豊富に駆使して、すぐれた研究となっている。マッケルロイを読んで結局、在留中に学会・クラブの書誌作成を手がけることになった。改良団体の方は大半見送ったが、理由は量が多すぎること、会史、議事録の類が乏しいことの2点である。マッケルロイとチトニスから抽出した会名カードの中から、さらに主要な学会・クラブにしぼって、'77年6月に、スコットランドに飛んだ。日程のつごうで、滞在期間が1週間しかとれなかったため、NLS, EUL, GUL の3ヶ所を原資料のみに限定して調査した。この時、調べ残した資料について、エディンバラ大に滞在される予定の福島大経済学部教授(当時)田添京二先生に面倒な調査をお願いすることになった。快くお力添えいただいたにもかかわらず、15年近くも放置し、今更ながら赤面の到りである。何とかまとめることができ、内心はっとしていた。先生には15年分のお礼を申し上げたい。さらに、大阪経済大学教授 竹本 洋先生と本誌編集部にも厚くお礼を申し上げなければならない。先生には、今回の印刷のきっかけを作っていただいた。じつは、長い間、'お蔵入り' していた私の仕事を '虫干し' する機会が2度あった。1988年11月の第8回西洋社会科学古典資料セミナー(一橋大古典資料センター)と、翌'89年10月21日の西洋古版本研究会(於武蔵大学)に、「スコットランド啓蒙期の出版物」についてお話をする機会を与えていただいたのである。一橋大の方で、主として個人著作(学・協会とはべつに調査してあったもの)をとり上げ、研究会の方で、学・協会・クラブ関係を報告させていただいた。この後の方の配布資料が、竹本先生のお目にとまった、というわけであった。まだまだ穴だらけの貧しい成果でしかなく、公表に値するのかどうか不安でもあるが、解題の方は、元々、英文でまとめてあったものを、今回、全面的に補筆して書き改めた。それをせめてもの救いとしたい。

注) 解題は、地名順(アバディーン、エディンバラ、グラスゴウ)、会名の単純なアルファベット順に配列してある。

Aberdeen. Philosophical Society of Aberdeen=Wise Club

1. 始終[以下同]: 1758—1773 [文献リスト No. 1—2]
2. 創設者他[以下同]: トマス・リード、ジョン・グレゴリー

1758年にアバディーン哲学協会として創設されたが、より広くは Wise Club と言う通称の下に知られている。会の起源は、Theological Club まで溯ることが出来る。この会の解散後、当時アバディーンに住んでいた Thomas Reid¹⁾と John Gregory²⁾

の二人が、より大規模の会を作る必要性について話し合い、“文学的・哲学的諸問題”を議論するための場として、哲学協会を設立した。当時“哲学”と言う用語は、自然哲学ないしは、ひろく学問一般と言うほどの意味で使用されている。アバディーンより早く、1737年にエディンバラに出来た Philosophical Society〔後出〕の場合も、それは同様であった。

会員は、当時のアバディーンのリテラーティ、多くは Marischal College の教授たちであって、1759年から学長を勤めた George Campbell³⁾、教授団の長 (Dean of Faculty) David Skene⁴⁾、自然哲学教授 George Skene、道徳哲学教授 James Beattie⁵⁾ およびアバディーン・カレッジの道徳哲学・神学教授 Alexander Gérard⁶⁾らが主要なメンバーであった。

すべての会員に対して、最低年に一つの論文を執筆することが義務とされ、論文の主題は厳密に“哲学的”であることが求められた。もし、会の活動が、言語、歴史、もしくは哲学上の議論のみに終始することがあれば、それは会の目的に離反するものと見做された。とは言っても、建前とは異なり現実には、会員たちの著作、論文のテーマは“哲学”の枠を破って多岐にわたり、啓蒙期における他の人文的な学・協会の一般的傾向と選ぶところがなかった。

デヴィッド・ヒュームの哲学的な立場は、スコットランド啓蒙思想の中核をなす道徳哲学派の中心人物ではあったが、数の上では少数異端派であった。ヒュームとアバディーン哲学協会との関係については、ヒュームの最大の攻撃者として知られるビーティを除けば、会員たちは概してヒュームの“懐疑主義”に対して同情的であり、ヒュームと個人的な親交を保つ者も少なくなかった。とりわけ、キャンベルとリードは一リードも又、ヒュームの強力な論敵で、哲学上の立場は対極にあるにもかかわらず、ヒュームとの交宜には熱心でさえあったと言われる。

スコットランド啓蒙期を通じて、グラスゴウの Literary Society〔後出〕が18世紀のもっとも印象的な文学クラブであったとすれば、アバディーン哲学協会は、1773年の終焉に至るまで、その高い学問的生産性のゆえに、明らかに時代のトップ・ランクの水準にあった学会として評価することができよう。

- 1) Thomas Reid, 1710—1796. 啓蒙期の最大多数派である常識哲学派 (Scottish Common-sense School) の父と呼ばれ、ヒュームの論敵の一人である。弟子に Dugald Stewart がいる。アバディーン King's College の指導教官 (regent) から哲学教授に進み (1751—64)、アダム・スミスがグラスゴウ大学道徳哲学教授を辞した後、その座を襲った (1764—96)。ちなみにグラスゴウ大 Moral Philosophy の教授ポストは、初代が Gershom Carmichael (1727—1729)、次いでスミスの師 Francis Hutcheson (1729〔30〕—46)、スミス (1751—1764) と引き継がれている。
- 2) John Gregory, 1724—1796. 医者。スコットランドの有名な知識人家系の一員である。

祖父 James (1638—1675) はニュートンの友人で、エディンバラ大初級の数学教授。反射望遠鏡を発明した。祖父の弟 David (1661—1708) も同じくニュートンの友人かつ後援者であり、自身はすぐれた天文学者であった。1683—1691年までエディンバラ大の数学教授を勤め、イングランドよりはるかに早く、スコットランドにニュートン理論を導入した。のちオクスフォード大の Savilian 天文学教授に転ずる。父 James はアバディーン大の King's College の医学教授、その後を John の兄、次いで John 自身が継ぎ、さらに息子 James へと引き継いだ。John は1766—1773年エディンバラ大臨床医学教授に転ずる。

- 3) George Campbell, 1719—1796. スコットランド教会 (Church of Scotland) の牧師で、モデレーツの一人。Marischall College の神学教授。1759—92年、学長。著作 “A dissertation on miracles, Edinburgh, 1762” はヒュームの懐疑論に対する反論の書として知られるが、著作中もっとも重要なものは、 “The philosophy of rhetoric. 2v. London, 1776” である。Daiches によれば、啓蒙期言語問題に関する最重要の産物と評価されている [Cf. Daiches, David & others, eds.: *A hotbed of Genius: The Scottish Enlightenment 1730—1790*. Edinburgh, 1986. p. 22]。同書は、キャンベルがアバディーン哲学協会の例会で読んだペーパーから発展したもので、ヒュームが死の直前キャンベルから送られてきたこの書を読んでいるところに、偶然 ボズウェル (James Boswell, 1740—1795) が訪ねあわせた、と言う。
- 4) David Skene, 生没年不明。アバディーンの大医者で、スコットランド北東部の自然科学分野の草分け的存在であった。
- 5) James Beattie, 1735—1803. 常識哲学派の中心人物の一人。その主著の一つ、 “An essay on the nature and immutability of truth, in opposition to sophistry and scepticism. Edinburgh, 1770” は、ヒューム攻撃の書である。初版はエディンバラの出版業者に引受け手がなかったため、友人たちの手によって私家版として出版された。1771年の第2版は、非常に成功をおさめ、ピーティに、 ‘Royal favour’ [ジョージ三世のお賞めの言葉] と、オクスフォード大の名誉博士の称号、および年金をもたらし。エドモンド・バークとサミュエル・ジョンソンの讃辞にも浴した。ヒュームは、この書を評して “a horrible large lie in octavo” と述べている。

グラスゴウ大学図書館に残る第2版刊本は、ジョージ三世が妃の侍医であった William Hunter に与えたもので、フライリーフにハンターの自筆メモが残されている。[ハンターについては、Glasgow. Hunterian Museum の項を見よ]。

- 6) Alexander Gérard, 1728—1795. Aberdeen College の道徳哲学・神学教授 (1751—95)。主著 “An essay on taste. 1759” は Edinburgh Society for the Encouragement of Arts, Sciences, Manufactures & Agriculture in Scotland [後出] の下部委員会である、Belles Lettres & Criticism Committee の1758年度懸賞第1位授賞作。のちに、カントは、この書を美学のもっともすぐれた書の一つである、と讃えた。

Edinburgh. Aesculapian [Society], のち Harveian Society

1. [1773]—[1906?] *ca.* 1780, Harveian [文献リスト No. 3—5]
2. アンドルー・ダンカン, *Sr.*

Aesculapian Society は名の如く医学協会である。1773年に Andrew Duncan, *Sr.* (1744—1828) が創設した。ダンカンは医者で、Alexander Monro, *Secundus*

の伝記¹⁾作者である（モンローは、モンロー・ダイナスティと呼ばれる三代にわたる医学者の家系で、二世は1758年に、父 Alexander Monro, *Primus* の後を継いでエディンバラ大学の解剖学・外科学教授となる）。

ダンカン²⁾は、1780年（もしくは、1781、又は1782年とする方が適切かもしれない。創設年については後述する）に、もう一つ別に医学生のための同好クラブ（Convivial club）、Harveian Society を創り、没するまで通算47年間にわたってこの二つの会の書記を勤めている。ハーヴェイアンの会員としては、ダンカンのほかに Alexander Hamilton や、Robert Graham がいた事が判っているが、イースキュレイピアンの会員については現在のところ調査が及んでいない。

ハーヴェイアンは別名 “Circulation Club” と呼ばれたが、それは会の綱領にある “...to commemorate the discovery of the circulation of the blood by the circulation of the glass” [酒杯であることは謂わずもがな、であろう] と言う少々ふざけた文章に由来するものであるらしい。イースキュレイピアンの方は、より真面目な専門学会として、1777年³⁾から、当年度のもっともすぐれた科学論文に賞を与えていた。応募者はひろくイングランドや、西インド諸島、ブラジル、北米などからも集まったと言う。しかし、小規模の専門学会として忽ち財政難におち入り、より財政基盤の健全なハーヴェイアンに支援を求めて、1780年からは授賞に際しハーヴェイアンの名称を使った。1782年には正式に、Harveian Society と会名変更を行なった³⁾。

ところで、イースキュレイピアンの創設年及び正式会名については、本稿では明確にすることが出来ない。マッケルロイ文献では、いずれの点についても明記されていない。この項の標題の会名を一応 “Aesculapian Society” [傍点は筆者による] と定めたが、これは [文献 No. 3] の所蔵館の目録のヘディングに基づいている。[No. 3] は、ハーヴァード大学ワイドナー図書館（Widener Library）と、National Library of Scotland [以下 NLS] に所蔵されており、“Carminum rariorum...” で始まる長いラテン語のタイトルの最後が “filiorum Aesculapii.” としめくくられている。したがって、タイトルからは会名が society とも club とも識別出来ない。編者は [Ed. by Andrew Duncan.] と角括弧中表示してあり、要するにヘディング、編者共に、図書館側の調査によるものであることを示している。

いま一つ、“Aesculapian Club” なる名称が [文献 No. 4] のタイトル中に示されており、[文献 No. 5] ではタイトルからは不明であるが、この2点の目録上のヘディングは “Aesculapian Club” となっている。これらはいずれも Edinburgh University Library [以下 EUL] の所蔵である（[No. 4] のコピーが NLS にあるが、恐らく EUL 蔵本からのコピーであろう）。これ以外に、W・J・ステュアートの研究文献⁴⁾がワイドナー図書館にあり、タイトルでは “club” となっている。したがっ

て、“Aesculapian Club”の方が正式名称であるかもしれないし、あるいは全く異なる会であるかもしれない⁵⁾。私自身は、同じ時期のエディンバラに二つも“Aesculapian”を名乗る会が出現する可能性は低いものと見て、一応‘Society’と‘Club’は同一機関であろうと判断した。

次に創設年の1773年は、〔文献 No.4〕のタイトルに拠った。〔文献 No.3~5〕は、いずれもマッケルロイの参照文献中には挙げられていない。マッケルロイが、イースキュレイピアンとハーヴェイアンの記述に関連して使用している文献は、主としてウェミス⁶⁾とヒュー⁷⁾の2点であり、前述のステュアートも使われた形跡がない。イースキュレイピアンからハーヴェイアンに転換する年については、マッケルロイは“...Aesculapian later Harveian”と明記しており、その時点をも1780—82年と述べているのは、おそらくヒュー文献に拠ったものであろう。

今一つ、ハーヴェイアンの始終年についてチトニスは“1752—ca. 1810”としているが、1752年は1782年のミスプリントか、もしくはチトニスの誤認であろう。1752年には創始者ダンカンはずか8歳に過ぎない。終息についても1810年ではなく、ヒュー文献から察すれば少なくとも1829年には健在であり、〔文献 No.5〕のタイトル中の“Supplement”部分がHarveianに転じて以後のことであるならば、1906年まで生き延びていたかもしれないのである。

1) Duncan, Andrew: An account of the life, writings, and character, of the late Dr. Alexander Monro secundus, delivered as the Harveian oration at Edinburgh, for the year 1818. Edinburgh, 1818.

2) McElroy, *op. cit.*, p. 140.

3) *ibid.*, p. 140.

4) Stuart, W. J.: History of the Aesculapian Club. Edinburgh, 1949.

5) Aesculapian……という団体名について、NUC (National Union Catalogue, アメリカ)とBritish Museumの蔵書目録を調査したところによると、NUCでは“Aesculapian Society, London”と、“同……Wabash Valley”の2点のみ、Edinburghの同名の会、あるいはAesculapian Clubは皆無である。B.M.の方はEdinburghの下にも、Aesculapianの下にも1点も検索することが出来なかった(いずれも本体のみ)。

6) Wemyss, H. L.: A record of the Edinburgh Harveian Society. 1933.

7) Huie, Richard: Harveian Oration for 1829: Being a tribute of respect for the memory of the late Andrew Duncan……Read at the Forty-Eighth Anniversary of the Harveian Society of Edinburgh, of which Duncan was the Founder. 1829.

以上のほか、次の文献が役に立つ。

Finlayson, C. P.: Records of Scientific and Medical Societies preserved in the University Library. Edinburgh, 1958. *Bibliothèque*, 1.

Ritchie, Robert Peel: The early days of the Royal College of Physicians, Edinburgh: the extended oration of the Harveian Society, delivered at the 114th festival by the President. Edinburgh, 1899.

Edinburgh. Belles Lettres Society

1. 1759—1764

〔文献リスト No.6～7〕

2. ジェームズ・グラント他5名

純文学クラブと言うほどの意味の、Belles Lettres 協会が創設された1759年と言う年は、Select Society〔後出〕が絶頂期を迎えた時期でもあった。

James Grant¹⁾は創設後初代の会長に選任され、会は毎週金曜日に開催された。会の運営はきわめて真摯で、会員は各自の持ちテーマで報告することが義務付けられ、報告に続いて討論が行なわれた。欠席すると罰金が課されたが、連続4回の欠席では退会処分という厳しい規則であった。入会審査、手続き等も厳正であったが、少数のすぐれた人物に対しては、名誉会員の地位が与えられた。この中に、ヒューム、William Robertson²⁾、Adam Ferguson³⁾、John Hope⁴⁾、John Runnells〔アメリカ人〕、William Lothian⁵⁾らがあった。

きびしい綱紀にもかかわらず、1761年頃までは文学クラブは高水準の活動を維持することができた。しかし、1764年頃⁶⁾を境として、会の消息は突然にとだえてしまう。その原因ははっきりしないが、恐らくは、1760年代に起こった金融危機によるものであろう、と推定される。この時期に Select Society や、そこから派生した二つの会、その他多くのクラブが運命を共にしている。

1) James Grant, 1743—1835. Advocate (弁護士)。Henry Erskine, James Makintosh, Francis Jeffrey [いずれも後出] らと親しい友人であった。父 Alexander Grant は1745年のジャコバイトであった。

2) William Robertson, 1721—1793. スコットランド教会の牧師で、モデレーツのリーダーの一人。1762年—93年エディンバラ大学長、Royal Society of Edinburgh〔後出〕の設立に力があつた。

3) Adam Ferguson, 1723—1816. 哲学者。社会学者。スコットランド教会の牧師で、モデレーツのリーダーの一人。1757年、ヒュームの後任として Advocate's Library の館長に就任。〔Advocate's Library については Philosophical Society の項を参照〕。

4) John Hope, 1725—1786. エディンバラ大学植物学及び 'Materia medica' 教授。

5) William Lothian, 1740—1783. Belles Lettres Society の討議テーマについての自筆メモ〔文献 No.6〕が NLS に残っている。マッケルロイは、ローシアンが書いたMS. を使っているが、〔No.7〕の "Proceedings" の方は記録していない。

6) チトニスによれば、Belles Lettres の1764年12月14日までの記録が NLS に残存していることになっているが、文献名が特定できない。おそらく〔文献 No.7〕の 'Proceedings' を指すものと思われるが、私が NLS の目録によって検索できたのは1761年までである。しかし、マッケルロイによっても、Belles Lettres の終焉は、1764年とされている〔*op.cit.*, p. 110〕。

関連文献：この場所を借りて、エディンバラ全体のクラブに関する研究文献をあげておく。
Literary and Philosophical societies of Edinburgh during the 18th century.

Edinburgh. Botanical Garden, のち Royal Botanic Garden

1. 1670+

[文献リスト No. 8~9]

2. 特定できない

Royal Botanic Garden として現在も継続しているこの植物園は、早くも1670年に誕生している。この時期は、農業を中心とする産業や工業の改良運動 (Scottish Improvements) の準備期にあたり、医学分野では Sir Robert Sibbald¹⁾, Archibald Pitcairne²⁾, Andrew Balfour³⁾, Charles Alston⁴⁾, William McNab⁵⁾らが、エディンバラの医学教育の基礎を布きつつあった。

植物学は臨床医学、外科学、薬学などと密接に結び付いており、エディンバラにはすでに18世紀すなわち、啓蒙期以前に、Botanical Garden のほか二つの植物園が開園していた。The Physick Garden と King's Garden at Holyrood がそれぞれ、上記の人物中のシッポルドとバルフォアが前者の創設に関わっている。

エディンバラにおける植物園の開花はグラスゴウよりも一世紀以上早かった。このように早い時期での植物学の進展が、その後のエディンバラ医学の隆盛⁶⁾を決定的なものとし、エディンバラ医学はスコットランド啓蒙期のハイライトを浴びて、その中心的な役割の一端を担うこととなったのである。

- 1) Sir Robert Sibbald, 1641—1722. ライデンとパリに学び、1662年アンジェルで Dr. を取得。アンドルー・バルフォアと共に Edinburgh Physic Garden を築き、1681年には Royal College of Physicians in Edinburgh を創建した。1685年、エディンバラ大学医学教授。
- 2) Archibald Pitcairne, 1652—1713. Royal College of Physicians を卒業し、シッポルドの後継者として Town's College の医学教授。監督教会員 (Episcopalian) として、ジャコバイト系の文化伝統の下で育った。ピトケアンは会員中に詩人の多い Jacobite Club を主宰したが経緯についてはつまびらかでない。
- 3) Andrew Balfour, 1630—1694. 植物学者。注 1) 参照。
- 4) Charles Alston, 1683—1760. 1716年、Botanic Garden の初代教授となる。
- 5) William McNab, 生没年不明。1810年、Botanic Garden に着任して園の植物コレクションの充実に力を注ぐ。息子 James (1810—1878), 孫 William Ramsay (1844—1889) も共に Botanist.
- 6) 1770年代のエディンバラは医学の世界的中心地であったが、それ以前に既に、エディンバラ大学医学部には81人のアメリカからの医学留学生がいた。1768年にスコットランド出身の John Witherspoon (1723—1794) が創設後20年頃のプリンストン大学第6代学長に選任された時、彼はただちに母国の哲学者フランシス・ハチスンやトマス・リードらの学問を輸入した。自然科学ではウィリアム・カレン (William Cullen) の医学、ジョー

ジフ・ブラック (Joseph Black) の化学などが、カリキュラムに取り入れられたのである。

関連文献

Fletcher, Harold R. & William H. Brown: The Royal Botanic Garden Edinburgh, 1670—1970. Edinburgh, HMSO, 1970

Edinburgh. Cape Club

1. 1764—1841

〔文献リストなし〕

2. ジェームズ・アイトケン

ケープ・クラブは、Poker [後出] や、詩人ロバート・バーンズが加わっていたことで有名な Crochallan Fencibles Club などと同じく、‘convivial’ な文芸クラブの一つである。そして、もっとも多様な社会階層のミックスしたクラブの典型と言われる。1764年、まずエディンバラに誕生し、1771年、グラスゴウに、その他ロンドン、マンチェスター、チャールストン、米国の南カロライナ州等にあい次いで同系クラブが設立された。

エディンバラのクラブは、関連文献³⁾によって、James Aitken が創設者の一人であることが判明している。創立当時のメンバーは、アイトケンのほか、James Cockburn, Thomas Lancashire (コメディアン), Michael Bruce (詩人), Alexander Clapperton, William Fleming, John Ross, Mungo Carrick, William Reid の9名であったと推定されている。1768年、アイトケンの提案で会員各自が騎士の称号を冠ることになり、Sir Speak (コクバーン), Sir Silence (リード), Sir Cape (ランカシア) などと名乗った。アイトケン自身は、Sir Poker を自称した。

これらの詩人、文人たちのほか、靴屋、洋服屋、医者、鍛冶屋、石彫職人、理髪屋、酒造業、印刷業、海軍軍人等、会員の職業は多彩をきわめた。最初の10年間に会員数は2百名に達し、1800年までには650の“騎士爵位”を与えたと言われる。ケープ・クラブには際立って著名なリテラーティは少ないが、創設期メンバー以外の会員として、クラブの中心人物であった David Herd²⁾、画家 Alexander Runciman³⁾、James Cumming [or, Cummyng]⁴⁾、John Wotherspoon (印刷業、ハードの協力者)、詩人 Robert Ferguson らがある。フェーガスンが入会を認められたのは1772年10月10日、Cape Club の“月桂冠詩人”と謳われたが、主著 ‘Poems’ 1773を残して翌年わずか24歳で夭折した。その詩はロバート・バーンズに深い影響を及ぼしている。

創設年について、文献によっては1733年説を採るものがあるが⁵⁾、これは James

Grant の思いがいが後世に誤まり伝えられたもの のようである⁶⁾。グラントは *Edinburgh Herald* 紙上で、ケーブ・クラブが1798年3月15日に65周年を迎える、と報じられたのを読んで、単純に引算をして創設年を割り出したものらしいが、当時ケーブ・クラブは、1766年から年に2回“Grand Cape”(ケーブ祭のようなもの)を実施し、それぞれが“1周年”とみなされていた⁷⁾。

- 1) [Cape Club's Sederunt book for 1764—1787] National Library of Scotland, MS. 2004 [McElroy, p. 171]

私は、NLS でこの文献を探しあてることが出来なかった。他にケーブに関する関連文献として、Herd, David: *Songs from Herd's Manuscripts*, edited with introduction and notes by Hans Hecht. Edinburgh, 1904. がある。

- 2) David Herd, 1732—1810. 好古学者。スコットランド民謡の収集家。
- 3) Alexander Runciman, 1736—1785. アラン・ラムジイと同時代の風景画家。Gavin Hamilton と共に長くローマに修業した。
- 4) James Cumming, 生没年不明。紋章画家。スコットランド紋章院の書記。のち Antiquarian Society の書記。カミングは1783—84年中、ケーブ・クラブの“君主”格であった。
- 5) Daiches, David, Jones, Peter & Jean eds.: *op.cit.*, p. 36.
- 6) Grant, James: *Old and New Edinburgh, its history, its people and its places*. London [etc.], [1883].
- 7) McElroy, *op.cit.*, p. 145.

Edinburgh. Friday Club

1. 1803—? [文献リスト No. 10—11]
2. ウォルター・スコット¹⁾, フランシス・ジェフリ²⁾他4名

フライデイ・クラブは啓蒙期のもっとも著名な三つのコンヴィヴィアル・クラブ—Poker, Oyster, Friday の中では、前二者ほどに有名とは言えない。そして、その成立ももっとも遅く、啓蒙期の末期、ちょうど第2期のエディンバラ・リヴュー³⁾の開始直前に、スコットが、ジェフリほか4名のメンバーと計らって創設したものである。その4名は、ジェフリと共にエディンバラ・リヴューの創始者の一人であった Sydney Smith (1771—1845), [Hugh] Murray (1779—1846)⁴⁾, Allen (詳細不明), 及び常識哲学派の中心人物の一人 Thomas Brown (1778—1820) であった。

会員の多くは、啓蒙期の著名な文人・学者であるステュワートや、ジョン・ミラー、ジョン・ブレイフェアらに育てられた啓蒙期第二世代(むしろ、第三世代か?)のリテラーティであって、全体としてウィッグ的傾向が強かった。旧世代もふくめて会員名を挙げれば、Sir James Hall [of Douglas] (1761—1832), Dugald Stewart⁵⁾,

John Playfair⁹⁾, Sir Archibald Alison (1757—1839, 同名の息子1792—1867の可能性もある), William Erskine (1769—1822, 弁護士, ウォルター・スコットの友人), Henry Brougham⁷⁾, Francis Horner⁸⁾, Henry Mckenzie⁹⁾, Henry Thomas Cockburn (1779—1854), Thomas Campbell¹⁰⁾らがある。ヘンリー・コクバーンは、1827年にフライデイ・クラブの会史〔文献 No. 11〕を執筆した。又、フランシス・ジェフリの伝記作者でもある¹¹⁾。フライデイ・クラブの最後は、コクバーンの会史によっても定かではない。

- 1) Sir Walter Scott, 1771—1832. 周知の人物である。啓蒙時代末期のもっとも著名な詩人・作家・法律家。スコットや Friday Club の時代を啓蒙期とみなさない研究者もいる。
- 2) Francis Jeffrey, 1773—1850. デュガルド・ステュワートの弟子。シドニー・スミスと共に第2期の Edinburgh Review を創始、編集にあたった。
- 3) Edinburgh Review, or Critical journal [etc.] 第1期は, Jan./July, 1755—July 1755/Jan. 1756 の2号のみで終刊となった。第一世代の活動場所となる。第2号に、アダム・スミスの書評〔Review of L'Encyclopédie〕が掲載されており、又、スミスのものと推定される編集者あての書簡がある。第2期は Vol. 1, No. 1 Oct. 1802/Jan. 1803—Vol. 250, July/Oct. 1929. 第1号をシドニー・スミスが編集し、フランシス・ジェフリは創刊から1829年まで引き続いて編集に関与した。
第2期エディンバラ・リヴューは、元来、1797年に創られて3年間続いた Academy of Physics という学生団体から発展した。雑誌の編集という形を借りて展開された最終段階の啓蒙運動と言えよう。18世紀半ばから19世紀はじめにかけての E. R. にしばしば登場したのは大学教育に関する論争である。もう一つは、産業革命期における労働の分業が労働者階級に及ぼした悪影響を、教育によって救おうとする Mechanics Institute の運動と連携して、この問題に関する論陣が張られた。論客として、ブルーアム、ホーナー、ジェフリ、シドニー・スミス、ブレイフェア、ステュワードらが活躍した。
- 4) Hugh Murray と推定されるが、Murray of Simprim であるかもしれない。正確なところは判らない。
- 5) Dugald Stewart, 1753—1828. 常識哲学派の大立物である。トマス・リードの弟子で、1785年エディンバラ大学道徳哲学教授に就任。第2期エディンバラ・リヴューを舞台にして、啓蒙期教育論争の中心になる。弟子に、ヘンリー・ブルーアム、フランシス・ジェフリ、フランシス・ホーナー、パルマーストン卿 (Lord Palmerston), ジョン・ラッセル (John Russell) ら。又、古典経済学派の J. R. マカロックが³⁾、ステュワートの政治経済学講義を聴いている。
- 6) John Playfair, 1748—1819. 数学者、地質学者。1790年当時、Royal Society of Edinburgh の自然科学部門の書記を勤める。エディンバラ・リヴューで、主として自然科学論に健筆をふるった (15年間に60の論文を執筆)。
- 7) Henry Brougham, 1778—1868. ステュワートの弟子。又、ジョージ・ブラック (化学) の最後の頃の講義を聞いている。のちの大法官上院議長 (Lord Chancellor)。啓蒙期人物の下限と言われる。
- 8) Francis Horner, 1778—1817. ステュワートの弟子。マカロックと共にエディンバラ・リヴューで経済学の論陣を張った。
- 9) Henry McKenzie, 1745—1831. 雑誌 “Lounge”, “Mirror” を創始、編集した

〔Mirror Club の項参照〕。スコットランドの伝説的詩人 “Ossian” に関する調査報告をまとめた〔文献 No. 44〕。

- 10) Thomas Campbell, 1777—1844. グラスゴウに生れ、グラスゴウ大学に学ぶ。1826年、大学の名譽総長 (Lord Rector) に選ばれ、'27年、'28年と三選される。処女作 “The Pleasures of Hope, 1799年” は同年中に 4 版を重ねた。詩人バイロンは、この詩を英語で書かれたもっとも美しい啓蒙の詩である、と讃えている。
- 11) Cockburn, Henry Thomas: Life of Lord Jeffrey with a selection from his correspondence. 2 vols. Edinburgh, 1852.

Edinburgh. Harveian Society

Edinburgh. Aesculapian [Society] を見よ。

Edinburgh. Highland Society of Scotland, のち Highland and Agricultural Society of Scotland

Edinburgh. Royal Highland and Agricultural Society of Scotland を見よ。

Edinburgh. Juridical Society, 1797年 Logical Society と合併。

1. 1773+〔継続か?〕〔文献リスト No. 12~17〕
2. ジョン・ラッセル, Jr. 他11名

1695年にジョン・スポティスウッド (John Spottiswood) が、法律学徒に向かって私的な学会の設立を提唱したが、不発に終わった。それから78年後の1773年、Juridical Society は12人¹⁾の若い弁護士修習生²⁾によって創立され、第1回目の会合が2月27日土曜日に開かれた。

最初の数年間は、純粋に法律知識の習得のための専門的団体として推移した。彼らは毎週土曜日の早朝、エディンバラ大学構内のスコットランド法教室で集会を持つか、市内の John's Coffee House という喫茶店あるいはその他二ヶ所の店のどこかに屯して、勉強会を続けた。会は大体二つの方法で運営された。一つは“スコットランド法の正規のコースを継続的に勉強すること³⁾”であり、いま一つは、“折々の法律上の諸問題を取り上げて議論すること”，すなわち、判例研究を中心とする勉強会であった〔文献 No. 12, 16を参照〕。

やがて、会は別の事業をも試みるようになる。一つは法律図書館の創設である（こ

の図書館は現在も存続している)。図書館の歴史は、1775年に彼らの勉強会のためにジョン・アースキン (John Erskine) の “Small Institute” を購入したことから始まった。他の一つの活動は、各種の司法文書の書式 (“the system of styles”) を収集することであった。この活動は、最終的には “Collection of styles” の出版として結実し、会活動のもっとも重要な所産となった〔文献 No.13 を参照〕。

しかし、会活動をあまりに極端に、専門的関心のみに絞こみ過ぎたためと、政治的討論——たとえばフランス革命についての論議など、を厳禁したことが原因となつて、会員の興味をつなぎ止められず、1796年頃までには会勢が漸減して行つた。かくて、会の活性化をはかるべく、1797年、その25周年を記念して、ジュリディカルよりはやや間口の広い活動 (法律と文学) を行なっていた Logical Society (1793年立) と合併し、活動の巾を政治、文学、道德哲学の分野にも拡大することによって蘇生した。以後、会は Juridical Society の名の下に継続することになる。

- 1) 創設時メンバー : John Russell, Jr., Alexander Nairne, Harie Guthrie, Jr., John Farquharson, John Lesley, John Buchan, Alexander Alison, Alexander Kidd, Phineas Hall, Thomas Macdonald, Charles Stewart, George Sinclair.
- 2) Writers to the H. M. Signet. スコットランドの法廷外弁護士を言い、職能団体として Society of Writers to the H. M. Signet を組織している。先の12人はこの弁護士の修習性であった。他に、Advocate と称する上級弁護士 (法廷弁護士) があり、Faculty of Advocate をつづっている。イングランドにおける Barrister (法廷) と Solicitor (廷外) の関係に対応する。
- 3) Erskine, John, 1695—1768: Institute of the law of Scotland; in four books; in the order of Sir George Mackenzie's Institutions of that law. Edinburgh, 1773.

本書が、ジュリディカル・ソサエティの若い学生たちの研修テキストとして使用されたと推定される。アースキンの最初の著作 “Principles of the law of Scotland. 1754年” と共に、スコットランド法研究の基本書として、多くの版を重ねている。

Edinburgh. Medical Society of Edinburgh, 1742年 Philosophical Society に吸収, 1783年 Royal Society of Edinburgh に発展する

Philosophical Soc. と Royal Society …… をも見よ。

1. 1731—1741 [文献リスト No. 18~19, 23, 61~62]
2. アリグザンダー・モンロー一世¹⁾

エディンバラ医学会は、1731年に、エディンバラ大学の初代解剖学・外科学教授であったアリグザンダー・モンロー一世によって、医学知識の改良を目指す会(Society

for the Improvement of Medical Knowledge の別名がある)として創設された。

会の主要な責務は、医学上の興味ある事例を集めて出版することであり、のちに10年の歳月を費やして、“Medical essays and observations...” 5巻が、モンローのほとんど独力による編集によって出版された〔文献 No. 18参照〕。この文献は、エディンバラの医学教育を裨益しただけでなく、ひろく、ヨーロッパ各国に迎えられ、英語版5版、その他フランス語、オランダ語、ドイツ語各版に多くの版を重ねた。

1737年に、この会から分れてより広汎な関心を持つ Philosophical Society が誕生した。しばらくの間二つの会は、並行して各自の活動を続けるが、1742年に合併して、以後 Philosophical Society の名の下に、自然系、人文系両分野の活動を営むことになる。Philosophical Society は、1783年に、ジョージ三世の勅許状を戴き、王立学会として今日に至る。現在のエディンバラ学士院がそれである。

なお、この会は同名の Medical Society of Edinburgh, 1734—1778 (1778年, Royal Medical Society of Edinburgh に発展。後出)と混同されやすく、エディンバラ大学図書館でさえ、この会の Philosophical 時代の出版物を、誤って Royal Medical Society の標目下に目録作成している〔文献 No. 23参照〕。本物の“エディンバラ医学会”に発展した方の Medical Society は6人の医学生が始めた勉強会だったのである。

- 1) Alexander Monro, *Primus*, 1697—1767. Monro dynasty の初代。1720 (or, 1719) *Primus* は、エディンバラ大解剖学・外科学教授。1758年 *Secundus*, 1808年 *Tertius* がその後を継ぐ。〔Aesculapian の項参照〕。

Edinburgh. Medical Society of Edinburgh, 1734 [1737 ?]—1777.

Edinburgh. Royal Medical Society of
Edinburgh を見よ。

Edinburgh. Mirror Club 前身: Feast of Tabernacles

1. 1770—1787 (?) [文献リストなし]
2. ウィリアム・クレイグ

Mirror Club は、イングランドの“The Spectator”を模したと言われる雑誌“Mirror”¹⁾および“Lounger”²⁾の刊行によって知られている。両誌の編集と執筆にもあたったヘンリー・マケンジー [Friday Club の項参照] は、‘Scottish Addison’ と

呼ばれた。

Feast of Tabermacles という会は、ジョン・ラムジーの記録³⁾によれば、弁護士や文人を主な会員として1770年に出現した文芸クラブで、のちに検事総長 (Lord Advocate) となった Henry Dundas (1742—1811) への、共通の友情によって結ばれていた。この、タバーナクルズからミラー・クラブが派生したことは、同じくラムジーの記述によって明らかであるが、その移行時期については明示されていない。

しかし、1774年から1782年にかけて、ダundasがミドロシアン地区 (Midlothian) 選出の下院議員を務めており、あわせて1777年には、検事総長にも就任したことから、エディンバラに不在の日が多くなったこと、1777年という年はまた、ヘンリー・マケンジーが William Craig (1745—1813. Advocate) の誘いに乗って、タバーナクルズに入会した年でもあった。それらの事実を考え合わせると、ミラー・クラブへの脱皮は1778年頃に行なわれたものと、推定されるのである。雑誌 Mirror の創刊を最初に提案した、いわば“言いだしっぺ”は意外なことに、クレイグである。Dictionary of National Biography の Craig の項から該当部分を引用しよう。

“Craig along with other advocates was a member of a literary society called “Tabernacle” ... On the suggestion of Craig they ultimately resolved to start a periodical for the publication of the essays, upon which they changed the name of the society to the ‘Mirror club’ the name given to the publication being ‘Mirror.’”

タバーナクルズ時代の会員で判明しているのは、Andrew Crosbie (*d.* 1785. 弁護士)。他に Archibald Cockburn (生没年不詳。ヘンリー・ダundasの義弟)、John Maclaurin, Lord Dreghorn (1734—1796, 裁判官。数学者 Colin Maclaurin の長子) らが会員であったらしいと推測されている。ミラー・クラブに転じて以後のある時期には、John Logan (1748—1788. 神父、詩人、Hugh Blair の弟子)、Blair⁴⁾(不詳)、Alexander Abercromby (1745—1795. 弁護士、裁判官) らが会員であったとマケンジー自身が述べているし、雑誌 Mirror の創刊号 (January 23, 1779) が刊行された時点における会員は次のとおりであった。

Henry Mackenzie, M’Leod Bannatyne (弁護士)、George Home (高等民事裁判所 (Court of Session) 書記)、Robert Cullen (弁護士) William Craig, George Ogilvie (弁護士)、Alexander Abercromby

マケンジーと高等民裁書記のジョージ・ホームを除けば、全員弁護士である。この中ではマケンジーだけがプロの文筆家であったが、初号にはオジルヴィを除くすべての会員が執筆した。当然ながらマケンジーの寄与率がもっとも高く、次いでクレイグが健闘した。Mirror は又、会員外の寄稿者として、Sir David Dalrymple, Lord

Hailes (1726—1792), Alexander Fraser Tytler⁵⁾, ジェームズ・ビーティ [Aberdeen. Philosophical Soc. の項参照], ヒュームの甥の David Hume (1757—1838. エディンバラ大学. スコットランド法教授), William Strahan (1715—1785. 印刷業, 『国富論』の印刷所) らの大物を擁していた。

スコットランドに “Tatler” や “Spectator” を希求する動きは, 1710年頃からいく度となく試みられたが, そのつど失敗に終わった。結局のところ, Mirror と Lounger が短命ではあったが, 唯一の成功例であった。しかも, その成功の主因は皮肉なことに, 本国スコットランドではかならずしも評判が芳しくなかったにもかかわらず, イングランドで好評を以て迎えられたことにあった。わけでも, マケンジーのエッセーが好評で, 1780年 Mirror が雑誌としての刊行を中止したのちも, 読者の強い要望に応じて, ロンドンやアメリカではあい次いでリプリントが刊行された。1813年までに少なくとも13版の英国版, および1817年以後に9版, 1792—93年には初期米国版が刊行されている。

- 1) Mirror. Weekly. Nos. 1—110, Jan. 23, 1779—May 27, 1780 [Aug. 21—Dec. 7, 1779 は休刊]
- 2) Lounger. Weekly. Nos. 1—101, Feb. 5, 1785—Jan. 6, 1787.
- 3) Ramsay, John of Ochtertype: Scotland and Scotsmen in the eighteenth century, ed. by A. Allardyce. 2v. I. Edinburgh & London, 1888.
- 4) Blair には Hugh Blair (1718—1800. Stevenson の弟子。1758年より没するまで High Church の牧師。1762年, エディンバラ大修辞学・文学教授。彼の修辞学は次世紀のアメリカで大きな影響を残した。ヒューム, スミス, ファーガソン, カーライルと共に Poker Club の会員) と Robert Blair (1741—1811. ヘンリー・ダンダスの友人。のちスコットランド高等法院長 (Lord President of the College of Justice)) の二人がいる。Mirror Club には法曹関係者が多かったから, 経歴から見れば, ロバート・ブレアである可能性が高い。
- 5) Alexander Fraser Tytler, Lord Woodhouselee, 1747—1813. 歴史家。エディンバラ大, 世界史 (Universal history) 教授。啓蒙期の著名な歴史学者の家系に生れ, 父 William Tytler はクイーン・メアリの擁護論者, Alexander 自身には ‘Elements of general history’ はじめ多くの著作がある。息子 Patrick Fraser Tytler は, ウォルター・スコットの友人。‘History of Scotland’ その他の著作がある。

Edinburgh. Museum of Science and Art のち, Royal Scottish Museum

1. Ca. 1760+ [文献リスト No. 20~21]
2. 不明

18世紀のスコットランドは, 改良, 啓蒙精神の具現として多くの学・協会, クラブの生誕を見たが, これと並行して他の多彩な組織活動—たとえばあらゆる種類の博物

館や植物園の開設、百科辞典の編集出版、雑誌、評論誌の編刊などが盛んに行なわれた。

Walker's Museum (John Walker に起因する) として知られる、エディンバラ大学の自然史博物館 (Natural History Museum of Edinburgh University) や、グラスゴウ大学の Hunterian Museum [後出] と同じく、王立スコットランド博物館もまた、18世紀にその起源を求めることができる。

注) スコットランド博物館に関する文献は、「文献リスト」の2点にとどまらず、本来しかるべきところを探せば、より多くの文献を尋ねあてることが出来るはずであるが、この項では小史を書くのが目的ではなかった。18世紀に出自を持つ博物館のサンプルとして提出したまでである。

Edinburgh. Newtonian Club

Edinburgh. Philosophical Society を見よ.

Edinburgh. Oyster Club

1. 1760年代—1790年以後 [公式記録なし, 文献リスト No. 22]
2. アダム・スミス他2名

Oyster Club は Poker に次いで名高い、啓蒙最盛期のコンヴィヴィアルなクラブである。スミスにとって、もっともお気に入りの“憩いの場” (resort) であった。しかし、その輝やかしい名声にもかかわらず、由来については漠たるところが多い。John Sinclair の “Memoirs” [文献 No. 22]¹⁾のほか、いくつかの文献に私的な記述が散見されるが、オイスターに関する公式記録が残っていないのもその一因となっているであろう。

創立年は1760年代のある時期であったことは確かだが、委細は明らかではない (スミスが第3代バックラー公爵を伴ってのヨーロッパの旅から帰国するのが1766年11月、半年間ロンドンに滞在後、'67年5月にはカーコウディの母の許に帰る。本格的にエディンバラのキャノンゲート (Canongate) に居を構えたのは10年後の1777年であった)。発会のイニシアをとったのがだれであったかも明らかではないが、ジョン・ブレイフェアによれば、創設期の会員はアダム・スミス、James Hutton²⁾、Joseph Black³⁾ の3人であったと言う。この3人の周辺に、啓蒙期第一世代及び後続世代の錚々たる学者、リテラータィが数多く集まった。中心メンバーのほとんどが同じ世代に属し、同じ時期に共に教育を受けた同期生のような間柄であった。彼らは“青春時

代の共通の経験を懐かしみ、若い日の交友を甦らせる”ことを第一義としたために、あえて新入会員の勧誘を行なわなかった。

当初、会合はエディンバラ市内、グラスマーケットのある宿場（Stabler. 第2級の旅館で、inn や tavern よりも格が低い）で開かれたが、オイスターの名声が汎く知れわたるにつれ、入会希望者が殺到したので、これを避けるためしばしば河岸を変えて、会の平穩を保った。複数の資料からマッケルロイが合成した名簿⁴⁾を再掲すると、〔原文のまま、（ ）内は筆者補充〕

Robert Adam, Architect⁵⁾(1728—1792)
Dr. Joseph Black (1728—1799)
Dr. Hugh Blair [Mirror Club を見よ]
—— Bogle, Laird of Dalowie
John Clerk of Elden, naval tactician
Dr. William Cullen (1710—1790)⁶⁾
Lord Daer
Dr. Adam Ferguson [Belles Lettres を見よ]
Sir James Hall, the geologist [Friday]
Dr. John Hope, Prop. of Botany [Belles Lettres]
Dr. James Hutton (1726—1797)
—— Macaulay
John M’Gowan, Clerk of the Signet
Henry Mackenzie [Friday, Mirror を見よ]
John Playfair [同上]
Dr. William Robertson [Belles Lettres]
Adam Smith (1723—1790)
Dugald Stewart [Friday を見よ]
Dr. Swediaur
visitors
Archibald Cochrane, 9th Earl of Dundonald
—— Cort
Samuel Rogers (1763—1855)

会の収束の時期についても明確ではない。前述のように、積極的に会員を補充して会の存続を図ろうとしたわけではなかったから、旧来の会員の老齢化とあい次ぐ死によって、いつとはなしに衰退の途を辿ったものであろう。その時期はシンクレアの記述からみて、スミスの死後いくばくもない1790年代のある年であったと推察される“... The last meetings of the club, which did not long survive the doctor [i. e. Adam Smith] ...”⁷⁾

スミスの没年1790年にはもう一人、13歳年長のウィリアム・カレンが他界し、5歳年長のヒュー・ブレアが1800年、2歳年長のウィリアム・ロバートソンは1793年、3

歳若いハットンが1797年、5歳若いブラックとロバート・アダムがそれぞれ1799年と1792年に没した。同世代ではひとり、スミスと同年のファーガスンが1816年まで生き残ったが、マケンジー、ブレイフェア、ステュワート、ジェームズ・ホールらはいずれもスミスより2、30年若い世代に属し、この後、舞台を Friday club に移し替えて、さらに若い世代を育成することになる。

- 1) 〔文献 No. 22〕の Memoirs は Sir John Sinclair, 1754—1835 の死を追悼して、息子シンクレアが書き残したもの。父シンクレアは、ジェームズ・アンダスン (James Anderson) と同じく、農業や産業の改良に一生を捧げた。“King of Improvers” と呼ばれ、ヨーロッパ13ヶ国の25の学・協会、農業団体から名誉会員の表彰を受けた。代表的業績は、18世紀スコットランドに関する金字塔的な社会学調査と評価される、“The Statistical account of Scotland” 21v. 1791—99 の編集である。シンクレアは又都市計画なども手がけたが、スコットランド北端の都市、シュアソーの計画が有名である。
‘Memoirs’ 中に、父シンクレアのオイスター・クラブに関する記述があり、会員名などが記されている。シンクレア自身はオイスターの会員ではなかったが、スミスを深く敬愛していた。又、息子シンクレアがオイスターとスミスに言及した大要次のようなパッセージがある。
‘……死を間近に迎えたスミスはすでに、オイスター・クラブに自ら出向くことはなかったが、ある日、キャノンゲートの自宅 Pammure House にクラブの人々を招いて、夕食を共にしつつ、古くからの親しい友人たちと一時の敏談をたのしんだ。しかし、予期しない闯入者によって、スミスの高揚した気分は吹き飛んでしまう。スミスは席を立ち上がり、さりげなく、‘あの世で又会おう’ と言って親しい者たちへ今生の別れを告げた……’
- 2) James Hutton, 1726—1797. 地質学者。18世紀地質学の新理論を樹立〔Wernerian Natural History Soc. の項参照〕。“Theory of the Earth” 1795 は代表作。化学者のジョージ・ブラックとはいわゆる刎頭の友である。ブラック、カレンと共に啓蒙期最大の影響力を持った自然科学者の一人。
- 3) Joseph Black, 1728—1799. 化学者。ウィリアム・カレンの最大の弟子。グラスゴウ大におけるカレンの化学と医学の講義を受講し、のち1752年、エディンバラに移って医学教育課程を卒えたが、この時の卒業論文、‘Dissertatio medica inauguralis, de humore acido a cibis orto, et magnesia alba, 1754’ が、のちに量子化学分析の基礎を開くものとなった。グラスゴウ大化学教授からエディンバラ大学化学教授に転ずる (1766—1797)。ジェームズ・ワットの蒸気機関車発明に大きな影響を与え、又、スミスやヒュームらとも親交があった。
- 4) McElroy, *op. cit.*, p. 169.
- 5) Robert Adam, 1728—1792. 建築家。William, Robert, James, John のアダム 4 人兄弟建築家として有名、父 William も建築家。Robert と James がとくに有名。エディンバラ New Town の建設を始め、橋、道路、町や村の設計等、スコットランドの至るところに足跡を残した。ヒューム、スミス、ロバートソン、ファーガスンらと親交があった。
- 6) William Cullen, 1710—1790. 医学者かつ化学者。エディンバラ医学史上もっとも卓越した人物と言われ、それまでラテン語であった医学の講義を最初に英語で行なった。著作は ‘Essays on the cold’ 一作のみであったが、講義がすぐれていることは並ぶものがなかった、と言われる。1744年グラスゴウ大医学部設立に尽力、のち化学に移る。1756年エディンバラ大化学教授、同時に Royal Infirmary の臨床医。1766、エディンバラ大

医学教授。1773—75, Edinburgh College of Physicians の学長。スミス, ヒューム, ファーガスンらと親交あり, 弟子にジョージ・ブラック。

7) Sinclair, John, *Jr.: Memoirs*, p.41.

Edinburgh. Philosophical Society of Edinburgh. 1783年 Royal Society of Edinburgh に発展.

Medical Society of Edinburgh, 1731— と

Royal Society …… を見よ.

1. 1737—1783

[文献リスト No. 23]

2. コーリン・マクローリン¹⁾の発議による

Philosophical Society は, 1783年に Royal Society に転ずることによって, 今日まで存続し, Royal Highland and Agricultural Society [後出]と同様, 後世に残るスコットランド啓蒙の遺産の一つとなった。その別名を Society for Improving Natural Knowledge [& also] Society for Improving Arts & Sciences と称し, 1737年に, 数学者マクローリンの示唆によって Medical Society から分離設立された(マクローリン自身は, Rankenian [後出]で, Medical Society の会員ではなかった)。

当時, メディカル・ソサエティの内部にはすでに自然科学全般および人文学をふくむ, いわばランケニアンの, 広汎な関心が芽生えており, 1735年頃にランケニアンの中心人物であった “Robert Wallace²⁾ が, Sir John Clerk³⁾, Mr. MacLaurin [i.e. Colin MacLaurin], Dr. Plummer, Prof. of Anatomy らに加わって, Philosophical Society の設立に協力した”と, スコッツ・マガジンに報じられている⁴⁾。

この会の基本的な特徴は, のちに Royal Society の活動に結晶することになるが, スコットランド啓蒙の基調を象徴的にあらわすかのように, 科学と哲学及び文学が幸福な結合をとげていることであった⁵⁾。しかし18世紀末にかけて, 啓蒙の精神が衰微するのと軌を一にしてこの結合は解体し, やがて, 諸科学の専門分化へと進んで行く。

初代会長はアバーダウア卿 (Lord Aberdour)⁶⁾。副会長は2名でサー・ジョン・クラークと従兄の John Clerk 博士, プリュマーとマクローリンの二人が書記を務めた。Medical Society に対するマクローリンの領域拡大案に基づいて, 会員の約3分の1は “哲学, 医学などの専門職に携わらない” 各層の “さまざまな紳士” (Divers gentlemen) でなければならない, とされた。会員総数は42名, うち少なくとも24名が普通会員 (ordinary member), 18名程度を特別会員 (extraordinary member) と

定めた。普通会員がいわゆる専門職にあたり，“自然，学術上の実験や発見を以て会に寄与し，会合で報告すること，会報に研究成果を印刷刊行すること”が求められた。1783年，Royal Society に転ずるまでの，この会の著名な専門会員をあげれば，

*Colin McLaurin, Joseph Black, David Hume, Adam Smith, James Hutton, William Cullen, Dugald Stewart, *Robert Wallace, *Alexander Boswell, *John Pringle, *Professor [John] Stevenson, Lord Kames, Alexander Monro, *primus*

*印は Rankenian Club の会員でもあった人々。

1742年に母体の Medical Society を統合した後，1745年のジャコバイトの叛乱 (Rebellion) と，1746年のマクローリンの死によって，会は一つの転期を迎える。Medical Society が “Medical essays” 5巻を遺産として残したように，それより広汎な分野をカヴァーする活動を一つの大規模な出版物として集約する必要があった。この時期の再編成によって，1752年⁷⁾，会長にモートン伯爵⁸⁾を再選，副会長2名に新たにケームズ卿⁹⁾とロバート・ウィット¹⁰⁾を選出した。モートンの死後，1768年にはケームズ自身が会長に昇格したとみられる¹¹⁾。さらに，ヒュームとアリグザンダー・モンロー¹²⁾の2名を書記として，かつ “Essays and observations” 3巻〔文献 No. 23〕の編者として選んだのである。これ以後の会の発展はケームズ卿の精力的な活動と指導力及びヒュームの知性と親和力，卓抜な調停能力に俟つところが大きかった。

- 1) Colin McLaurin, 1696—1746. ニュートンを除けば，18世紀のもっとも傑出した数学者と言われる。11歳でグラスゴウ大学に入学〔もっとも，当時は，この年齢での大学入学は，とくに珍しいことではない〕，19歳でアバディーン大学の数学教授，21歳で英国学士院の会員となった。1725年，ニュートンの推挙によってエディンバラ大学数学教授に就任する。
- 2) Robert Wallace, 1697—1771. スコットランド教会の牧師。モデレーツの中心人物の1人である。1746年にヒュームがエディンバラ大学道徳哲学教授のポストを志向して不調に終わった時，教会関係者でヒュームを支持したのは，ウォーレスただ1人であった。主著 “A dissertation on the numbers of mankind in Antient and Modern times and some remarks on Mr. Hume’s Political discourse, intituled of the populousness of antient nations. 1753” は，Philosophical Society で読んだペーパーをまとめたもの。刊行をめぐって，すでに同じテーマで，ウォーレスとは相反する立場から ‘Political discourse’ を発表していたヒュームとの間に，友情に溢れたやりとりがあった。
- 3) Sir John Clerk [of Penicuik], 1684—1755. 裁判官。18世紀前半の卓越した好古学者。後半を11代ブーキャン伯 (David Stewart Erskine, 11th Earl of Buchan) が代表する〔後出〕。1750年当時 Baron of the Exchequer。
- 4) Wallace, George: Memoirs of Dr. Wallace [i.e. Robert Wallace]. In Scots Magazine, Vol. 33, 1771. p. 341.
- 5) Essays and Observations [文献 No. 23], Vol. 1 に付された序文中で，ヒュームは

次のように述べている。“all the sciences are remarked to have a close connection together: but none more than those of medicine and natural philosophy.” 自然哲学という用語は、学問一般と言うほどの意味で使用されており、医学との結びつきが強調される。ヒュームはここではとくに科学と文学との結びつきについては言及していない。しかし、同じ序文中の別の箇所、Philosophical Society の目的にふれて “... promoting of natural philosophy and literature ...” と述べている。ヒュームが会の目的から明確に除外したのは、神学・道徳及び政治学であった。

- 6) Lord Aberdour[この人物については今のところ不明である。DNB その他には出てこない]。初代会長アバーダウアー説のソースは、マッケルロイによれば、Scots magazine and Edinburgh Literary Miscellany, Vol.66 p.421—422: Two original letters from prof. Maclaurin to his friend Dr. Johnston ... である。一方、Wallace の ‘Memoirs’ [注4]によると、p.341r の Philosophical Society の創設に関連したパセージ中で、[会長]は、Morton 伯と述べられている。

‘He [Robert Wallace] co-operated, about 1735, with that incomparable physician Dr. John Clerk, Mr. Maclaurin, ... and ... in forming at Edinburgh, under the auspices of his learned and Noble friend, the late Earl of Morton, a Philosophical Society.’

DNB のモートン伯の項での記述も、‘Memoirs’ とほぼ一致している [注8] 参照]。

さらに、モスナーのヒュームの伝記 (Mossner, Ernest Campbell: Life of David Hume. London, 初版 1954) 中に、‘... Earl of Morton continued as president [1751年, 12月]’ とあり、つまり、’51年以前から、モートンが会長であつたらしいことを窺わせるのである。無論、1737年当初から引き続きであつたか否かは、この文面からは判断できない。

- 7) Rebellion の前後、会の活動には長い沈滞期があつた。そこで組織を再編成して活動を再開するのだが、この年が1751年か52年かは明らかでない。モスナーはヒューム伝の中でヒュームとモンロー [一世] が書記に選ばれたのが1751年の12月であつたと推定している。しかし、マッケルロイは、“1752年” とする文献が多いことを指摘した上で、もっとも信頼できるソースとして、ケームズが1752年12月26日付で、ウィリアム・カレンあてに発信した書簡を採っている。ケームズは、“... Remember also to contribute to the Philosophical Society, [中略] now that I have got in a good measure the control of it” と書き送って、会の要職に就いたことを示唆している。いずれにしても、12月の第1火曜日が Philosophical Society の選挙日と定められていた。
- 8) James Douglas, 14th Earl of Morton, 1702—1768. 天文学者。1739年 Edinburgh. Society for Improving Arts and Sciences (Philosophical Society の別名) の初代会長 [DNB]。1733—63年の30年間、ロンドンの英国学士院 (Royal Society of London) のフェローとして、天文学の論文を寄稿する。
- 9) Henry Home, Lord Kames, 1696—1782. スコットランド法学の祖、ステア卿 (1st Viscount Stair, James Dalrymple, 1619—95) 及び Sir George MacKenzie (1636—91) の流を承継する法律家。スコットランド啓蒙期の重要人物の1人である。スミスやヒュームのような第一級の思想家とはみなされていないが、極めて行動力に富んだ、スケールの大きな人物で、スミス、ヒューム、ジョン・ミラー、ヒュー・ブレアなど多くの若い学者・文人にとって師父的な存在であつた。知的生産のみならず、農業技術や土地改良にも意欲を持ち、自ら実践にとり組んだ。
- 10) Robert Whytt, 1714—1766. エディンバラ大の薬理学教授 (Theory of Medicine) Royal College of Physicians, Edinburgh の学長。
- 11) McElroy, *op.cit.*, p.37. 根拠資料は、ケームズあてのベンジャミン・フランクリンの

書簡。

- 12) 1752年〔モスナー説では'51年〕の再編成にあたって、通説では、アリグザンダー・モンロー二世が、ヒュームと共に書記に選ばれた、としている。マッケルロイはこれを全面的に否定し、一世に間違いないと断定した。その根拠は、—— 1) モンロー二世 (1733—1817) は、'52年当時19歳。エディンバラ大学医学生でヒュームの相手としては力量不足である。ヒュームはすでに41歳で、哲学者としての盛名高く Advocate's Library〔*〕の館長職にあった。モンロー一世ならば、年齢も55歳、何よりも Philosophical Soc. の母体である Medical Soc. を創った当人であり、'Medical essays' 5巻の編集実績もある。ヒュームの相手として不足のない人物である。2) より決定的な根拠として、ニュージーランドのオタゴ大学医学部図書館 (Medical School of the University of Otago) に、モンロー一世自伝の自筆原稿が保存されており、“エディンバラ大学紀要”の Vol. 17 に上梓された。これによると、モンロー一世は1759年まで Philosophical Society の書記を務め、同年、副会長に選出される。そして、モンロー二世が父に替わって書記職に就いている。——

ちなみに、モンロー二世は1755～58年にかけて、ライデンとベルリンでさらに医学の研修を続け、帰国後26歳で父の後を継いでエディンバラ大の解剖学・外科学教授となった。同年、前述のように Philosophical の書記にも就任するが、“Essays…”の第1巻はすでに1754年、2巻が1756年に刊行されており、最終巻が1771年。したがって、二世が関わったのは最終巻のみということになろう。

- * Advocate's Library 上級弁護士協会の図書館。ジョージ・マケンジー〔本項の注 9) 参照〕が1689年に設立した。のちにマケンジーのコレクションを中核として National Library of Scotland が生まれる。ヒュームは1752年に館長に就任したが、図書の購入をめぐる館員たちと対立したことが端緒となって、1757年に辞任する。ヒュームの前任者は Thomas Ruddiman、後任を Adam Ferguson が勤めた。

Edinburgh. Newtonian Club, 1778—(?)

Philosophical Society の内部組織として、フィロソフィカル・ソサエティのもっとも活動的なメンバーが集まって創った。多くはエディンバラ大学の教授たちで、会員数は20名と限定され、Philosophical の集会終了後ただちに、この会の集まりが開かれる慣行となっていた。

創設は1778年、前年にケームズ卿が会長に選出され、Philosophical Society は会勢再建策の一つの方向として、Royal Society への転換を模索している時期であった。議事録が残っていない（と言うよりは、作らない方針であった）ため、Newtonian の創設意図は明白ではないが、Royal Society への昇格運動の推進グループとして働いた、とも推測できよう。王立学会昇格運動の起点がエディンバラ大学にあったという事実と、Newtonian に同大学教授が多かったということの間には、偶然とは言えない関連がありそうである。

主要会員は、（括弧内は筆者による）

Andrew Duncan, Sr. [Aesculapian の項参照]

James Gregory (1753—1821. Aberdeen King's College の教授, のち, エディンバラ大臨床医学教授 (Prop. of Practice of Medicine))

Daniel Rutherford (1749—1819. 外科医, エディンバラ大植物学教授)

Dugald Stewart [Friday, Oyster, Philosophical 参照]

James Russell (1754—1836. エディンバラ大臨床外科学教授)

John Hope [Belles Lettres 参照] エディンバラ大植物学教授)

John Gardiner (生没年不詳. エディンバラ在住の医者)

William Smellie (1740—1795. Newtonian の書記を務めた。印刷業, 好古学者, 法律家, 哲学者で医者。Britannica 初版を編集, 又, ロバート・バーンズの友人で, バーンズの 'Poems' のエディンバラ版を印刷出版した) [Friday の項をも参照]

Edinburgh. Poker Club

1. 1762—1784

[文献リスト No. 24~27]

2. アダム・ファergusン

啓蒙期にエディンバラに生まれた三つのコンヴィヴィアル・クラブ——Poker, Oyster, Friday の中で, Poker はもっともポピュラーなクラブである。1762年の創設にあたっては, アダム・ファergusンが中心的役割を果たした。ポーカー (火かき棒, 突つくもの) という名称も, ファergusンの着想によるものとされている (一説では, アダム・スミスが名付親だと言われる)¹⁾。

Poker Club は単なる文芸クラブではなくて, 明らかに“スコットランド的な”性格を有する会であった。すなわち, 会史 [文献 No. 25] を執筆したアリグザンダー・カーライル²⁾によれば, クラブはスコットランド・ミリシア (Scottish Militia)³⁾計画を宣伝し, その創設に向けて愛国心を鼓舞する意図をもって組織された会であった。とはいえ, *Militia Club* のように旗幟鮮明な直接的戦斗集団としてではなく ('not so directly or obviously offensive as that of Militia club...'), コンヴィヴィアルな文芸クラブの擬装の下に, ひそかに世論を“かき立てて”, 客観情勢を有利な方向に展開する役割を自らに課したのである。“poker”の意味するところは, 無関係な第三者には謎めいていようと, 会員にとっては明瞭であった。かくて, ミリシア問題に対する態度は, 啓蒙期の思想家たち各自が, 労働の分業体制が次第に深く浸透してきた市民社会を, どのように理解しているかを示す踏絵ともなったのである。

会員の中心メンバーは、主として Select Society [後出] から移動してきた（というよりは、かけもちの）人々と、アリグザンダー・カーライルが Griskin Club（グラスゴウ、1756年立）から引き連れてきた仲間たちであった。（括弧内は筆者による）

Adam Ferguson, *Alexander Carlyle, David Hume, Sir John Dalrymple (1726—1810. 4th Baronet of Cranstoun. 1784年頃 Solicitor to the Board of Excise), Adam Smith, *Hugh Blair, *Joseph Black, John Jardine, John Robinson (エディンバラ大自然哲学教授, 1792年頃, Royal Society of Edinburgh の書記), Henry Dundas, *John Home (1722—1808. 悲劇 'Douglas' の作者, Scottish Shakespeare と謳われる。'Douglas' の評価をめぐって、ヒュームを始めとする知識人たちはナショナルリスティックな過剰反応を惹き起こす), *James Edgar, *Fletcher Campbell [いずれも生没年不詳]

*印は、1786年 (or '87) の最終会まで出席した人々⁴⁾。

[文献 No. 25] の1776年1月26日付の名簿には43名が記入されている。

クラブは主として冬季、トマス・ニコルスン (Thomas Nicolson's), フォーチュン (Fortune's) などエディンバラ市内のタバーンで、週1回夕食時に会合を開いた。毎回、2名の次週幹事が定められ、理由なく欠席する者には罰金が課されたが、その罰金とは、会合の飲食費全額の請求書が彼の下に送りつけられる、という仕組みなのであった。こうして、Poker Club は20年以上の歳月を重ねた。数年の休止後、1786年か'87年に、より若い世代を加えて再生を図ろうとしたが、失敗に終わった。衰退の原因は Oyster の場合と大同小異のようである⁵⁾。最後の会に新たに加わってきた人々は、タイトラーによれば⁶⁾次の人々であった。

Lord Woodhouselee (Alexander Fraser Tytler), Dugald Stewart, Lord Daer, Dr. W. Greenfield, John Playfair, William Robertson, David Hume, the nephew, Lord Bannatyne, Patrick Brydone (1741—1818), George Home, William Craig, Henry Mackenzie, Robert Dundas, John Morthland, Dr. Rutherford, Henry Grieve, William Waite

1) [文献 No. 25] は、エディンバラ大学図書館に保存されている、カーライル執筆による Poker Club の名簿をふくむ議事録草稿である。この序文に、同じくカーライル筆の、'Account of the club prefaced to the records from 1774—1784' と題する会の小史が付されている。マッケルロイは、この文献を記述のベースに使っているが、この中に次の一節があって、会の名付親はアダム・ファergusンとされている。

"In the beginning of the year 1762 was instituted the famous club called the "Poker"... Professor Adam Ferguson luckily suggested the name of Poker, which was perfectly intelligible to all the originators of the scheme, while it

was an impenetrable mystery to everyone else.”〔下線は筆者による〕

次に同じくカーライル文献で、J.H. パートン編の自伝があり〔文献 No. 27〕、この中の、上記と対応する小節は次のようになっている。

“In the beginning of 1762 was instituted the famous club called “The Poker” ... Adam Smith fell luckily on the name of ‘Poker’ which we perfectly understood, and was at that time considered an enigma to the public.”〔下線は筆者による〕

パートン版に依拠する研究文献は、したがって、スミス説を採用することになる。ファergusson 説、スミス説の混乱の根源が、カーライル文献そのものに存在することは疑いないところだが、これがカーライル自身の記憶の不正確に基づくものか、パートンの編集ミスによるものかは、現在のところ、はっきりしない。NLS に保存される、カーライルの自筆原稿 (Manuscript of the greater part of the autobiography) と、パートン版を照合すれば、あるいは判明するかもしれない。

私の推測では、ファergusson 説の方に分があるように思われる。何故ならば、〔文献 No. 25〕の、カード上に記載されたエディンバラ大図書館の注記によれば、この MS. は、アダム・ファergusson の死後 (1816 年没)、1854 年に彼の長子が図書館に寄贈した原本であって、もし、名付親がファergusson 自身でなかったのならば、生前に何らかの訂正を施したのではないかと、想像されるからである。

- 2) Alexander Carlyle, 1722—1805. Inveresk の牧師。モデレーツでエディンバラ・リテラータの代表的人物の一人。“Jupiter Carlyle” と呼ばれ、Select Society や Poker Club の主要メンバーとして、多くの重要記録を残している。
- 3) 当時、民兵軍は、王の意思に支配されることの少ない、自由な国民軍として、自立的な近代国家の形成に資するものとみなされ、その創設に向けて盛んな運動が展開された。しかし、1757 年の Militia Act によって、イングランドにのみ民兵軍の創設が認められ、Scottish Militia は拒否された。
- 4) Cockburn, Henry Thomas〔文献 No. 11〕
- 5) Scott, Walter: Prose works of Sir Walter Scott. Edinburgh & London, 1835. Vol. 19, pp. 337—338.
- 6) Tytler, Alexander Fraser, Lord Woodhouselee: Memoirs of the life and writings of the honourable Henry Home of Kames ... 2v. Edinburgh, 1807.

この文献に Rankenian の名簿 (George Wallace が提供したもの) のほか、Poker の名簿もつけ加えられている (Woodhouselee 自身が後期の会員であったから)。

Edinburgh. Rankenian Club

1. 1717¹⁾—1774 〔公式記録なし。関連文献、リスト No. 28—29〕
2. 中心人物：ロバート・ウォーレス

啓蒙期のもっとも早い時期に誕生し、しかも長命なクラブであった。同時期に Ruddiman's Club と the Associated Critics が発会したが、いずれも短命に終わっている。Rankenian はまた、啓蒙精神をもっとも典型的に体现したクラブでもあった。Thomas Ruddiman²⁾ の率いる Ruddiman's Club と Rankenian を対比して、マッケルロイは次のように述べているが、鋭く本質を衝いた発言と言えよう。

“The Primary concern of Ruddiman’s group and the Associated Critics drew their attention to Scotland’s past, the Rankenian’s to Scotland’s future.”⁸⁾

ランケニアンという会名は、集会場所であったタヴァーンの亭主の名前——Thomas Ranken からとられている。ランケニアンの主たる目的は、ジョージ・ウォレスが父ウォーレスの回想記〔文献 No. 28〕の中で述べているように、“自由な対話と合理的な追求によって相互に改良発展を図ること⁴⁾”であり、毎週前述のタヴァーソンで、文学や哲学書の新刊をめぐる議論したり、英語の表現スタイルを磨いたりした。タイトラーが、ケームズ卿の回想録を執筆するにあたって、彼の求めに応じてジョージ・ウォーレスが提供した名簿⁵⁾によれば、会員は次の23名である。(通し No. は原文のまま、括弧内は筆者補充による)

1. William Wishart (*d.* 1753. スコットランド教会の牧師. エディンバラ大学長. 1744年, ヒュームのエディンバラ大道德哲学教授就任に反対した.)
2. Archibald Murray (生没年不明. エディンバラ近傍の Murrayfield で弁護士)
3. Robert Wallace [Philosophical Society の項参照]
4. Isaac Madox (生没年不明. ウースターのカトリック教会監督 (Lord Bishop of Worcester))
5. John Horsley (1699—1777. ウェストミンスターのセント・マーチン教会牧師)
6. John Stevenson (生没年不明, エディンバラ大論理学教授 (1730—75)) 弟子に Alexander Carlyle, Robert Clerk, William Robertson, Hugh Blair など)
7. George Turnbull (1698—1748. モデレーツの1人. アバディーン, Marischall College の道德哲学教授. トマス・リードに影響を与えた。)
8. Colin Maclaurin [Philosophical Society 参照]
9. George Young (生没年不明. エディンバラの医者)
10. John Smibert (1684—1751. 肖像画家)
11. Charles MacKay (生没年不明. 弁護士. エディンバラ大市民史教授)
12. William Hepburn (生没年不明. アンガス (Angus) Inverkeilor の牧師)
13. Nichol Graham of Gartmore (同上. 弁護士)
14. George Wishart (同上. エディンバラ, トロン教会 (Tron Church) の牧師. スコットランド教会の主任書記)
15. Alexander Dick of Prestonfield (1703—1785. 医者. Baronet)
16. Sir John Pringle (1707—1782. 医者. Baronet. エディンバラ大道德哲学教

授。国王の侍医で英国学士院長 (Royal Society of London)

17. Charles Maitland of Pitrichie (生没年不明。弁護士。下院議員)

* Charles Maitland, 3rd Earl of Lauderdale (d. 1691) の息か? 5人の息子中に Charles という名前の人物がいる。

18. Alexander Boswell of Auchinleck (1706—1782. スコットランド民事裁判所判事)

19. Sir Andrew Mitchel[1] of Thainston (1708—1771. 外交官、弁護士のち、ベルリン裁判所の特命全権大使)

以上がオリジナル・メンバーである。そして、“クラブが40年以上存続したのち、会員中死亡したり、何時とはなく会から離れるなどの事情で出席者がかなり減少してきたため、創設会員の子息たちを入会勧誘しよう、ということになった。この決議の結果、次の各士 “gentlemen” が会員に加えられた。”とあって、次の4名が記録されている。

20. Thomas Young (生没年不明。ジョージ・ヤングの息。エディンバラ大産婦人科教授。Thomas Young, 1773—1829. 医者之父か?)

21. George Wallace (d. 1805? ロバート・ウォーレスの息。弁護士)

22. John Maclaurin of Dreghorn (1734—1796. コーリン・マクローリンの息。スコットランド民事裁判所の判事)

23. Alexander Murray of Henderland (1736—1795. アーチボルド・マレーの息。スコットランド民事裁判所の判事)

会員中、ロバート・ウォーレスは、このクラブの存続を支えていた、もっとも重要な人物の一人であったが、その死後(1771年)3年にして、クラブは解散に至った。

“In the winter of 1771, a few months after the death of Dr. Wallace, the Rankenian Club resolved to discontinue their regular weekly meetings; and a few occasional meetings were afterwards held, down to the year 1774, from which time it ceased altogether.”⁶⁾

ところで、ランケニアンたちが、クラブを挙げてイングランドの哲学者 George Berkeley と親交があったことは有名な話である。ヒュームは当時、エディンバラ大学の学生で、ランケニアンであり、かつ、パークリと文通のあった彼の師を通じて(だれであったのかは、不明)、パークリの哲学に接触したらしいと思われる⁷⁾。

ヒューム自身がランケニアンであったことを立証する証拠資料の有無については、現在のところ私にとっては霧の中である。NLS の「スコットランド啓蒙期」展観目録⁸⁾中のランケニアン・クラブに関する解説は、「ヒュームが会員であった」としているが、典拠は示されていない。ランケニアンに関しては、ジョージ・ウォーレスの

回想記と、タイトラーに与えた「名簿」とが、ほとんど唯一の信頼に足るソースであると思われるが、このいずれにも会員としてのヒュームの名前はみあたらない。「名簿」には日附が示されていないが、おそらく1774年の解散時直前か、父ウォーレスが死去した頃のもの（実質的には変化がないであろう）と推察される。かつての経過期に、ヒュームが入会した可能性が全くないわけではないとしても、それならば、ウォーレスの「回想記」にヒュームの名が触れられていないのは奇妙ではなからうか。

この短いメモワールの中で、ウォーレスがヒュームに関して発言した唯一の箇所は、父ウォーレスが、かつて Philosophical Society で報告した論文を1753年に出版した折に、友人ヒュームの書に対する批評を併載した、と述べたくだりのみである。

“... The dissertation, which he [i. e. Robert Wallace] revised in 1747, was published at Edinburgh in 1753, together with an appendix, containing observations on a political discourse, published in 1752 by his friend Mr. Hume, [傍点筆者]”⁹⁾

ヒュームのメンバーシップに関しては、マッケルロイも素通りであるし、チトニスも明確には述べていない。ただ、チトニスは前述のように、ヒュームがランケニアンであった師を通じて、パークリの影響を受けた可能性についてのみ言及している。ともあれ、ランケニアン中の10名の会員で100冊以上の出版物（著作30、編集・出版2、翻訳3、説教35、パンフレット11、学位論文5、詩集2、戯曲1）を刊行して、この会は啓蒙時代の中枢期を見事に生き抜いたのである。

- 1) Rankenian Club の創設年について、マッケルロイ、チトニスは共に1716年としているが、ジョージ・ウォーレスの「回想記」では1717年となっている。“... In 1717 a society, called “The Rankenian club,” from the master of tavern at which it met, being instituted at Edinburgh, ...” [同書 p.340-r] 又、NLSの展覧目録でも1717年としている。
- 2) Thomas Ruddiman, 1674—1757. 印刷業。啓蒙期有数のラテン学者である。ジャコパンの伝統の強い Aberdeenshire に生まれ、ナショナリストとしての気質が濃厚な人物。スコットランド文化をヨーロッパに広めるための手段として、ラテン語に国際言語機能を持たせようとした。一方で、スコットランド語にスコットランドのアイデンティティーを見出そうとした。ヒュームの前任者として Advocate's Library の館長を勤めている。
- 3) McElroy, *op.cit.*, p.26.
- 4) [文献リスト No.28] は、父ロバート・ウォーレスに捧げる、息子ジョージの追悼録であるが、Rankenian Club の公式記録がないため、クラブについてのもっともすぐれた解説であり、かつ唯一の信頼に足るソースと見なされている。
- 5) [文献リスト No.29], Vol.1 の Appendix No.8.
- 6) *Ibid.*, p.52
- 7) Chitnis, Anand C.: The Scottish enlightenment—A social history. London, 1976. pp.197~198.
- 8) National Library of Scotland: Scottish thought in the eighteenth century.

[An exhibition catalogue on the occasion of the week-end Conference on Scotland and the Enlightenment, 2—5 April 1970, held by the Institute for Advanced Studies in the Humanities of the University of Edinburgh] Edinburgh, 1970.

9) Wallace, George, *op.cit.*, p.343-r

Edinburgh. Royal Botanic Garden

Edinburgh. Botanical Garden を見よ.

Edinburgh. Royal Highland and Agricultural Society of Scotland

前身: Highland Society of Scotland のち Highland and Agricultural Society of Scotland

1. 1784—86 Highland Soc. 1787+ as Royal... [文献リスト No.30~54]
2. ハロルド・W・タムスン

スコットランドの農業や産業の改良を目的として設立された多くの改良団体 (Improvements Societies) の中, 1800年までに創設された最後の, 重要かつ, もっとも成功した協会である。ハイランドと呼ばれる貧困なスコットランド北部, 及び西部高地方の農業改良団体として1784年に発足, 1787年には王の勅許状 (Royal charter) を下付されて, 王立スコットランド・ハイランド地方農業協会となり, 今日に至っている。

創設者は Harold W. Thompson (生没年不詳), ヘンリー・マケンジー [Friday 及び Mirror club 参照] がこれに加わった。他に William Dick (生没年不詳), James Anderson¹⁾らがある。“Prize essays and transactions, 1799” [文献 No.39] の序文に設立の目的が次のように認められている。「1782年の, ハイランド地方における農作物の不作は, 農業技術改善が必要であることを示した。ハイランド地方のみならず, ローランド (Lowland) 地方にも又, ひいては世界的にみても, 科学的農業を樹立することによって, 最高の現実的価値を生みだすことが出来るであろう。本会は, この目的を以て創設された。」として, この会の設置と活動が, カナダや北米の農業にも役立ったことを強調した。

次いで, 会のもう一つの目的として, 「本会は又, ハイランド地方に固有の言語, 詩文, 及び音楽の保存にも適切な関心を払うものとする」と表明している。改良団体においてすら, 啓蒙期固有の性格が表出されていると言うべきであろう。この目的に添った活動の例証として, フライデー・クラブの項でも触れたヘンリー・マケンジー

の業績をあげることが出来る〔文献 No. 44〕。

1790年、世界でもっとも早く、エディンバラ大学に農業問題の講座開設を支援し、又同大に、比較解剖学と獣医科の併設講座の設置を勧告して拒否された時、ウィリアム・ディックを援けて、Dick Veterinary College を開校せしめた。のちに、これが Royal Veterinary College of Edinburgh となった。

この会と類似の農業改良団体を、創設の早い順にあげてみると、

The Society of Improvers in the knowledge of Agriculture 1723—1745(?)

〔後出〕

Highland Society of Glasgow, 1727.

Highland Society of London, 1778.

Gaelic Club in Glasgow, 1780. 等がある。

このほか、短命ではあったが、農・産業奨励のみならず学術・文化全般の奨励団体として、より濃厚なスコットランド啓蒙的色彩をもつ Edinburgh Society for the Encouragement of Arts, Sciences, Manufactures & Agriculture in Scotland〔後出〕がある。Improvement societies は、政府や地方自治体関係機関等もふくめると、筆者の知る限りでも30以上が存在していた。

- 1) James Anderson, 1739—1808. John Sinclair と並ぶ啓蒙期随一の改良運動家。18世紀スコットランド産業にもっとも精通した著者の一人であり、アダム・スミスは、アンダソンを ‘a very dilligent, laborious, honest man’ と評している。又、雑誌 “The Bee” を編集主宰した。

Edinburgh. Royal Medical Society of Edinburgh

前身：Medical Society of Edinburgh, 1734〔1737か?〕—1777.

1. 1778, as Royal... + 〔文献リスト No. 55—58〕
2. ジョージ・クレグホーン他

Medical Society of Edinburgh は、1778年に王の勅許状が下付されて、正式の王立エディンバラ医学会に昇格した。母体の Medical Society はエディンバラに二つ目に来た医学協会で、1734年、わずか6人の医学生¹⁾によって始められた。1731年に生まれた最初の医学会が、専門の医学者によって創られながら、Philosophical Society を経て、エディンバラ学士院に発展して行ったことは、既に述べた通りである。

6人の医学生たちは、隔週に仲間のだれかの下宿を会場にして集まった。最初のうち、彼らはもっぱらラテン語もしくは英語で、医学の学位論文を輪読していた。1735

年には、クレグホーン1人を残して当初のメンバーは四散したが、翌年クレグホーンと、新たに参加したジョン・フォザージル (John Fothergill) の努力によって、1737年までには会員数は10名に復し、エディンバラ医学会の基礎はゆるぎないものとなった。

書物の勉強会だけではなく、実際の臨床例についてもさまざまに研究したり、議論を重ねる間に、いつしか収集した文献や資料が相当量に達した。そこで彼らは、会の固定した拠点となる建造物が欲しくなり、その中に図書室、会議室、実験室等も備え付けたいとの願望が強まったのである。

1763年、エディンバラ王立病院 (Royal Infirmary) がこの会に会合場所を提供することになった。1771年からは建設資金の募金活動が始められ、1776年、ついに念願の自前の建物が完成する。1779年には、Philosophical Society も一時、月例会の開催場所として医学協会ビル内のホールを借用していたことがある。

1778年12月14日にいよいよ Royal Charter が下付されて、王立エディンバラ医学会に転ずる。この時与って力のあった人々は、時の検事総長 (Lord Advocate) ヘンリー・ダンドラス [Mirror Club の項参照]、メイトランド (James Maitland, 8th Earl of Lauderdale, 1759—1839) らであった。

以後、エディンバラ医学会の特筆すべき活動として二つの事業があげられる。一つは1778年から '79年にかけての、医学学位論文の出版である。ウィリアム・スメリー [Philosophical Society, Newtonian Club 参照] の責任編集の下に、Edinburgh Medical School の1725—59年間の論文中的すぐれた就任学位論文が選定され、“Thesaurus Medicus” の形式をとって出版された。〔後代のものが NLS, EUL に1点あった。文献 No. 56〕他の一つは、医学振興のための懸賞論文の募集で、1784年から開始され、毎回当選論文には20ギニー (21ポンド相当) 金貨のメダルが贈られた。

会員中の著名人物としては、ウィリアム・カレン、アンドルー・ダンカン、フランシス・ホーム、ジョン・ホープ、ヘンリー・ブルーアム [以上既出]、James Mackintosh (1765—1832) らがある。これらの著名な医学者たちの活動によって、当時エディンバラの医学研究・教育の水準は世界最高のレベルにあり、とくに、独立戦争の渦中にあった初期アメリカの医学や化学に及ぼした影響は、はかり知れないものがあった。わけてもウィリアム・カレンの医学は、早くからアメリカ医学教育のカリキュラムに導入され [Botanic Garden, 注6]、カレンは“アメリカ医学の父であり、アメリカ化学の祖父である”と讃えられた。

エディンバラに留学中のアメリカ医学生の中には、この Medical Society に加入する者も少なくなかったが、この中に John Moultrie (1747年加入)、Peter Middle-

ton (1747), Samuel Bard (1763), John Morgan (1762), Adam Kuhn (1766), Benjamin Rush (1767), Casper Wistar (1784) らがあった。彼らはそれぞれアメリカ医学界の草分けとして活躍したが、とりわけモーガン、ラッシュ、ウィスターは医学史上に大きな足跡を残した。

モーガンはカレンと親交のあったベンジャミン・フランクリンの紹介状を携えて渡英し、エディンバラでの修業成って帰国後ただちに、フィラデルフィアに Medical Society を興した。また、他の数人と共にペンシルヴェニア大学医学部 (University of Pennsylvania, Medical College) を創設し、初代の内科学教授となった。彼は又、American Philosophical Society の創設者の一人でもあったが、これは彼より数年遅れてエディンバラに渡ったベンジャミン・ラッシュが、フィラデルフィアの Medical Society 創設時にモーガンに書簡を送って、フィラデルフィアに文芸及び医学の双方を含む学会を設立する利点を説いた結果、その誕生を見たものであった。かくて、American Philosophical Society は明らかに、Philosophical Society of Edinburgh をモデルとして生まれた組織であったと言えよう。

ラッシュは、彼の時代のアメリカやスコットランドの事情についてすぐれた知見を含む、日記、書簡を数多く残しており、“アメリカのボズウェル”と呼ばれた。帰国後24歳でモーガンが創ったペンシルヴェニア大医学部の化学教授となり、モーガン没後はその後継者となった。又、Rush Medical College of Philadelphia を創設、Institute of Medicine 教授、Royal Medical Society の名誉会員等を歴任した。1776年7月4日、「アメリカ独立宣言」の署名者の一人でもある。ウィスターは1784年、エディンバラの医学会に加わったが、その翌年には会長の一人に選任されている。帰国後、ペンシルヴェニア大学解剖学教授を勤め、Wistar Institute of Philadelphia を創設した。

- 1) 創設時6人の医学生は、George Cleghorn, William Cuming, Alexander Hamilton, James Kennedy, Alexander Russell, Archibald Taylor.

関連論文2点をあげると、

- ① Gray, James: History of the Royal Medical Society 1737—1937, ed. by Douglas Guthrie, 1952.
- ② [Stroud, William]: “History of the Medical Society of Edinburgh,” Prefaced to a “List of members, laws and Library Catalogue, of the Medical Society of Edinburgh Instituted 1737 Incorporated by Royal charter 1778.” 1820.

Edinburgh. Royal Physical Society of Edinburgh

1. 1788年, Royal Charter 下付。〔文献リスト No. 59~60〕

王立エディンバラ物理学会については、調査が及んでいないため、解題を見送った。この時期に、農・産業技術改良と関連して、化学、繊維、鉄鋼等多くの科学・技術分野の学・協会が発生するが、すべて今回の対象からは除外した。

Edinburgh. Royal Scottish Museum

Edinburgh. Museum of Science and Art を見よ。

Edinburgh. Royal Society of Edinburgh

前身: **Philosophical Society of Edinburgh 1737—1783** 及び

Medical Society of Edinburgh, 1731—1741

Philosophical... 及び Medical... をも見よ。

1. 1783+ 〔文献リスト No. 61~62〕
2. ジョン・ウォーカーの発議による

1770年末から1780年代にかけて、スコットランドではいくつかの学協会が王の勅許状を下付され、ロンドンの英国学士院と同等の意味における正式学会として、社会的認知を受けることになった。Royal Medical Society of Edinburgh (1778, 前出), Royal Society of Edinburgh (1783, 本項), Royal Society of Antiquaries of Scotland (1783, 後出), Royal Highland and Agricultural Society of Scotland (1787, 前出), Royal Physical Society of Edinburgh (1788) がそれである。

1783年, 3月29日 Philosophical Society に対して下付されたジョージ三世の勅許状は, Society of Antiquaries と拮抗して取得したものであった。この間の事情については“Antiquaries”の項で述べる。1777年頃まで Philosophical Society は会勢が冴えず落目であったが, 同年ケームズ卿が会長に就任する¹⁾に及び, 盛んなアイディアと積極的な行動力を駆使して, 会の経営面にすぐれた力量を示した。

これ以前に, パリやベルリンの科学アカデミー, その他ヨーロッパ諸国のアカデミー, 近くはロンドンの英国学士院 (Royal Society of London) に倣って, スコットランドにおいても広汎な学術分野をカバーする王立学会が必要である, との認識が

エディンバラの知識人の間に広まりつつあった。John Walker²⁾がこのアイディアの最初の提唱者であったと言われるが、Royal Society 実現に向けての端緒の動きは、エディンバラ大学の教授たちから起こってきた。彼らの大部分は Philosophical Societyの会員でもあったので、教授たちの王への請願運動は、ただちに同会の動議可決するところとなった。ケームズ卿のリーダーシップの下に、運動の勢いが加速されたことは想像に難くない。やがて、11代ブーキャン伯による Scottish Antiquaries の創設と、それに引き続く Antiquaries 陣営の王立学会昇格運動との絡み合いが、火に油を注ぐ結果となって、エディンバラ大学及び Philosophical Society の勅許請願活動は一気に燃え上がることになった。

エディンバラ学士院成立後、1783年6月23日の第1回会合で、“Philosophical Societyの全会員は、そのまま学士院会員に移行すること”が決議された。会は、当時のエディンバラ大学長で、Royal Society 推進派の代表格であったウィリアム・ロバートソンの勸告にしたがい、ヨーロッパ諸国のアカデミーに範をとって、学問・知識の全分野をカヴァーするものとし、これを二つの部門に分かった。一つは医学及び自然科学部門、他の一つは文学部門である。医学部門に数学、自然史、化学、薬学、自然哲学及び実用科学、工業技術・技芸の改良がふくまれた。文学部門には、文学、哲学、歴史学、思弁哲学、好古学が属した。そして、この二部門の研究成果発表のためのセクションと、他に会史に関するセクションを設けて3セクションとなし、“会報 (Transactions)”〔文献 No. 62〕を刊行する運びとなったのである。

しかし、文学部門は当初から活動が低調であったようである。あるいは、リジッドな学会形式による活動が、啓蒙知識人たちの自由な精神とは相容れなかったのであるうか。1783年11月17日に第1回目の会合が開かれ、ヒュー・ブレア〔Mirror, Poker 参照〕、レイ・キャンベル (Ilay Campbell, 1734—1823. 弁護士, Lord President. Archibald Campbell の長男)、ウィリアム・ロバートソン、エリコック卿 (Lord Ellicock. 詳細不明) が初代の部会長に選任されたが、集会の参加人員も少なく、非公式の集まりのような雰囲気であったと、と伝えられている³⁾。

文学部門は、結局、わずか15年ほど存続した末に消滅することになる。1800年までには、会報に占める “Literary Section” はもはや機能を失い、これ以後エディンバラ学士院は、もっぱら自然科学分野のみの学会に転じた。

- 1) ケームズ卿は1768年に一度、モートン伯の没後、副会長から会長に昇格した (Philosophical Society の項参照)。引き続いて会長職にあったか否かは不明であるが、1777年の就任は再選であろうか。根拠は “Transactions” I (1788) pp. 6~7.
- 2) John Walker, 1731—1803. エディンバラ博物館の初代教授。又、1779年、ウィリアム・スメリーが志して不成功に終わったエディンバラ大学自然史教授のポストに就く。1792年当時、Royal Society の書記を務めた。

3) McElroy, *op.cit.*, p. 80. 1789年に“Literary Section”の部会に出席した Samuel Rogers の印象が次のように引用されている。

“We [Adam Smith, Henry Mackenzie, James Hutton, and Rogers] went to the Royal Society. Only seven persons there. Dr. [James] Anderson read an essay on Debtors and the revisions of the laws that respect them, written by himself, very long and dull. Mr. Commissioner Smith fell asleep. Mackenzie touched my elbow and smiled.”

関連文献：

Shapin, Steven: The Royal Society of Edinburgh: A study of the social context of Hanoverian science. Ph.D. dissertation, University of Pennsylvania, 1971.

Weld, Charles Richard: History of the Royal Society, with memoirs of the Presidents. London, 1848.

Edinburgh. Select Society of Edinburgh

1. 1754—1764 [or '63?]¹⁾

[文献リスト No. 63]

2. アラン・ラムジイ二世²⁾

Select Society は、18世紀スコットランドの生んだ文学クラブの、もっともすぐれた典型の一つと言われている。創始は天分豊かな画家ラムジイの提唱によるものである。ラムジイはのちに、エディンバラを去ってロンドンに移り住み、ジョージ三世お抱えの宮廷画家になるのだが、エディンバラに住んでいる間の1754年5月、彼の親しい友人であるヒュームやスミスと、“debating society”創設計画について話し合ううちに、その願望が実を結んだのである。

5月22日水曜日、発会の集まりが開かれた。ラムジイ、ヒューム、スミスの3人のほか、この日出席したのは次の12人である。

John Jardine (1716—1766, エディンバラの牧師), Dr. Francis Hume [Francis Home か? 既出], Mr. Anderson [James Anderson か?], Alexander Wedderburn (1st Baron Loughborough, 1733—1805. のちに大法官兼上院議長 (Lord Chancellor)), Simon Fraser (生没年不明. 弁護士), James Burnett, Lord Monboddo³⁾ (1714—1799. のち高等法院長 (Lord of Session)), John Campbell (弁護士. 1708—1775の Campbell か?), Alexander Carlyle [Poker Club 参照], William Johnston (生没年不明. 弁護士), James Stephenson Rogers (生没年不明. 弁護士), John Swinton (d. 1799. 弁護士), Alexander Stephenson (生没年不明)

5人の重鎮—ヒューム、スミス、モンボド卿、ウェダバーン、そしてカーライル、スコットランドの生んだこれらの卓越した人物が会員中に存在したことによって、

Select Society の権威は比類のないものとなった。開会にあたって、スミスは会の目的を次のように述べている。“哲学上の諸問題を追求し、会員の話技 (art of speaking) を改良すること”と。

当初の間、彼らは毎週水曜日の夕、Advocate's Library を会場として顔を合わせた (52年、ヒュームが館長に就任しているので、場所の便宜をはかったものであろう)。しかし、創設後1ヶ月も経たない6月12日には会員数は倍増し、翌55年2月までには83人に達していた。会場はほどなく、“Laigh Council House”の階上にある St. Gile's Masonic Hall に移された。新たに加わった68人のうちには、John Home, William Robertson, David Dalrymple, Gilbert Elliot, Hugh Blair, Patrick Lord Elibank, Alexander Dick, William Wilkie, Duke of Hamilton, そして、Lord Kames のような有力な人々があつた。これ以後も会員数は漸増してついに130人を数えるまでになり、そのうち50人を下らぬ人々がのちに DNB に掲げられるような著名人物であつたという。1759年10月現在で、カーライルが作成した会員名簿⁴⁾から、さらに、上記にふくまれない人物を捨てると、John & James Adam 兄弟 (既出、建築家)、Robert Dundas (のち高等民事裁判所長 (Court of Session)), William Cullen, Adam Ferguson (いずれも既出)、Lauderdale 伯爵家の Errol, Aboyne, Selkirk, Roseberry & Cassils, George Drummond (1687—1766. エディンバラ市長) がある。

集会時には、事務的報告の後、名簿順に当日の司会者を定め討論に入つたが、討論テーマは会員中から提出された諸問題をプールしたリストの中から選び、前回の集会時に公表する決まりになっていた。討論テーマはきわめて多様で、アパディーンの Philosophical Society や、グラスゴウの Literary Society [後出] のそれと類似の内容であつた。マッケルロイの指摘によれば、Select Society の関心がジョン・レーの述べるように、“非常に経済 (学) 的であつた”⁵⁾とする事実は認められない。レーは、後述する Select Society の派生組織、産業奨励会の議事内容と誤認したのではないかという。

Select Society から二つの部会が派生した。一つは、1755年2月12日の議決を承けて、ケームズ、エリバンク、ハミルトン、ウェダバーン、D・ダーリングブルら10人の検討委員会がつくれ、その結果生まれた産業奨励組織、“Edinburgh Society for the Encouragement of Arts, Sciences, Manufactures, and Agriculture”である。他の一つは、1761年に生まれた会、“スコットランド訛を美しい英語におきかえよう”というスローガンを掲げる “Select Society for Promoting the Reading and Speaking of the English Language in Scotland”であつた。この二つの部会を、母体とまったく別の団体と見做すのは当を得ていない。むしろ、Select Society の、三つの

レベル—哲学的、経済的、そして社会的なレベルにおける活動とみるべきものであろう。

Select Society は短命に終わった。二つの部会も共に、時を経ずして母体の後を追いついて、活動を停止した。通説によると、原因は言語改良部会のスコットランド訛追放運動が、スコットランド市民のナショナリズムを刺激し、改良部会のみならず母体の Select Society の信用をも失墜させ、解散に追いやったのだとしている。あり得る推測ではあるが、文献的な確証は得られていない。この臆測はさておき、会員、とくに主要会員の中から、創設期の情熱が次第に失われていったプロセスは、記録を通じて明らかなのである。1756年頃からすでにその兆しが見え、'59年には動かし難い事実となっていた。1760年代の金融危機も深刻な作用を及ぼしたのであろう。事実、財政難のため産業奨励会はメダルの数を減らさざるを得なかったし、言語改良部会も本格的な旗上げに至らず、挫折を見ている。しかし、三つの会がスコットランド社会の、知的あるいは工業的レベルにおける改良発展に寄与したものは、決して小さくはなかったであろう。

- 1) 終年の1764年について〔文献 No.63〕では、1763年2月8日の記録で終わっているが、マッケルロイによれば、1764年終年となっている〔McElroy, *op. cit.*, p. 110〕。ソースは挙げられていない。
- 2) Allan Ramsay, the painter, 1713—1784. 18世紀スコットランド最大の肖像画家。ヒューム、ハチスン、セント・クレア、モンロー一世、ルソーら、多くの同時代人の肖像を描いた。文筆家としても、数々の著作がある。父 Allan Ramsay, 1686—1758 は詩人で、1725年、イギリスで最初の巡回図書館の一つを作った。
- 3) James Burnett, Lord Monboddo は精力絶倫、奇矯の人として知られる。エネルギーな点はゲームズ卿と共通しているが、啓蒙期知識人としての姿勢は、およそその逆で、全体として後向きである。古代ギリシャを愛し、近代をギリシャ時代から照射して、より劣ったものと批判した。第一作 “Of the origin and progress of language.” 6v. 1773—92 によって、人類学の先駆者と言われている。
- 4) Stewart, Dugald: Account of the life and writings of William Robertson... and of Thomas Reid. London & Edinburgh, 1801.

Appendix として1759年10月現在の Select Society 会員名簿が付されている。ステュワートの求めに応じて、アリグザンダー・カーライルが書き送ったもの。ロバートソンの著作集 (Works, 1721—1793. 12v.) の第12巻にも、同上伝記とこの名簿がおさめられている。名簿には、本文記述のほか、スミス、ヒューム、ジョン・ホーム、D・ダーリンブル、ヒュー・ブレア、ゲームズ卿の名前が挙げられ、その他多数の弁護士、牧師、医者、7人の商人、4人の軍人、となっている。

なお、カーライルのパートン版自伝〔既出〕、p. 312 にも Select Society に関する記述がある。

- 5) Rae, John: Life of Adam Smith. London, 1895, p. 110.

Edinburgh. Select Society for Promoting the Reading and Speaking of the English Language in Scotland

1. 1761—1765

[文献リスト No. 64]

Select Society から派生した二つの部会の一つであり、目的はスコットランド人の言語改良、すなわち、“ブリティッシュ・イングリッシュを正しく読み、かつ話す能力を高める”ことにあった。もともと、話技の改良を目的の一つにもつ Select Society から、こうした部会が派生したのは、ある意味では当然の成行きである。

Select Society の外的な条件としては、当時スコットランド社会は、学問・文化・産業のすべてにわたって“イングランドに追いつけ、追い越せ”というステージにあったから、新しい文化創造のためには、どうしても土着言語を脱皮して、近代言語としてのイングリッシュにのり換える必要があった。しかしながら、言語問題に対する人々の姿勢は、大方が同じ方向を向いていたわけではない。社会階層によっても当然異なるし、知識人の間でも立場は輻輳していて、単純に二分することは出来ない。ヒュームやスミスは、当然、美しい英語で話し思考することが、スコットランドの未来を志向するものと考えていたが、トマス・ルーディマンやその周辺の人々は、スコットランドの文化的ナショナリズムの立場から、スコットランド語によってスコットランドのアイデンティティを証したいと欲した。一方、思想的にはヒュームの対極にある常識哲学派の人々も、多くは言語改良に賛成であり、中でもヒュームの最大の敵対者ジェームズ・ビーティは、もっとも熱烈な改良論者であった。

改良の波に乗るもの、乗り損ねるもの、社会の表層部はまさに変革期のかっとうのただ中にあった。ボズウェルはこの時期の人々の右往左往を揶揄して次のように述べている。“It was better for a Scotsman and an Irishman to preserve so much of their native accent and not to be quite perfect in English, because it was unnatural.”¹⁾ しかしながら、底流の部分では、たとえば学校の初等教育過程で静かに変革が進み、スコットランド社会における英語の使用を確実に日常化しつつあったのである。

一方、Select Society の内部的要因としては、まずラムジーである。ラムジー二世は父ラムジーとは対照的な性格の人間であった。詩人の父が、野にある“磨かれざる玉”であったのに比し、息子ラムジーは万事にきわめて洗練されたタイプであったという。スコットランドとイタリアで、当時としては最高の教育を受け、最後はロンドンに住んで、宮廷画家になり、英国学士院の会員にもなった。スコットランド人嫌いで有名なサミュエル・ジョンソンでさえ、“ラムジーほどに気が利いて、豊富な知識に富み、しかも優雅な会話を交すことのできる人物は、ほかにはいない”と言って舌

を巻いたという。ラムジーはまた、文筆家としても並み並みならぬ力量の持主であった。

このラムジーが、最初に、言語改良部会創設のアイディアを示して相談をもちかけたのは、ほかならぬヒュームとスミスである。ヒュームが、言語問題に強い関心を寄せていることは論を俟たない²⁾。この時期には 'History of Great Britain' (2v. 1754—57) が刊行され、流麗な英語のスタイルによって高い世評を得ていた。スミスの格調高い英語表現にはつとに定評があり、1759年の *Moral sentiments* によって、それはすでに立証されていた³⁾。

こうして、Select Society の内外で、言語改良事業を進展させるための客観的条件が整いつつあったが、なおかつ、もしも、ある一つの事件に逢着しなかったならば、改良部会は陽の目を見ることがなかったかもしれない。それは“シェリダン事件”とでも呼ぶべき出来事であった。かいつまんで言えば、Select Society は、Thomas Sheridan という人物の、英語学校詐欺商法に、まんまとひっかかってしまったのである。1761年6月10日にエディンバラにやってきたシェリダンは、2期に分けて英語学校を開校するというふれこみで、まず、1期は、予告どおり忠実にこなした。世評は上々である。ところが、第2期の宣伝をし、授業料の徴収やテキストの予約販売を終わっても、シェリダンは授業を開始しない。そればかりか、話はどこでどうすり替わったのか、Select Society が英語学校を開く、という事態に発展するのである。

かくて、新生部会の目的とプランの詳細が1761年8月の *Scots magazine* に、“Regulations of the Select Society for Promoting the Reading and Speaking of the English Language in Scotland” のタイトルの下に〔文献 No. 64〕宣伝された。計画によれば、エディンバラに本格的な英語教育の学校を建設し、本場イングランドから優秀な教師を招いて、紳士貴顕、子供たちに至るまで美しい英語を身につけさせる、というふれこみであった。シェリダンは、イングランドから教師を紹介することも約束した。1年が過ぎ、新役員としてアダム・ファーガスン、ウィリアム・ロバートソン以下16名の常任理事、ジョージ・ドラモンド市長、ケームズ卿以下10名の非常任理事の顔ぶれも整った。しかし結局、この計画は何一つ実現することなく、画餅に帰したのである。その後、'63年2月22日と、'64年7月30日に会合の案内が雑誌 *Caledonian Mercury* に掲げられたが、最終的には1765年に、この会は不毛の一生を終えたのであった。

1) Boswell, James: *The ominous years*, ed. by Charles Ryskamp & others. London, 1963. p. 125.

2) ヒュームには 'Scotticisms. ca. 1752' の著作がある。Political discourses. 1752 に合本されている場合があるが、のち、Philosophical works. 4v. 1826 に収録された。

- 3) 'Consideration concerning the first formation of languages.' In Philosophical miscellany, 1. 1761. スミスの言語問題に対する関心は、最初にこの短命であった雑誌の論文に実った。のちに、この論文は少しタイトルを変えて、'Moral sentiments' の3版以降の版に付された。

なお、スミスが、エディンバラ大 (1748—51) や、グラスゴウ大 (1762—63) で、修辭学と文学の講義を行なっていることは、周知の事実で、学生による講義ノートが残っていることも言うまでもない。

Edinburgh. Edinburgh Society for the Encouragement of Arts, Sciences, Manufactures & Agriculture in Scotland

1. 1755—1765

[文献リスト No. 65—67]

母体 Select Society の“改良精神”のうち、経済的関心から発した部会がこの会である。Select Society 自身は、必ずしも経済的問題にのみ傾斜したわけではないことは、前述のとおりである。

この新しい会の企画では、懸賞金を有意に配分することによって、工芸技術と産業の改良をはかろうとした。すなわち、たとえば美術に対する賞金は名誉的なものにして、印刷術、製紙業、リネン工業などのような、より有用の工芸には多額の現金賞金をふり向けるなどの操作をするのである。

賞金の運用のため9人の常任幹事 (ordinary managers) と、さらに9人の臨時の幹事が選出された。前者に Lord Deskford, Lord Dalmenie, Sir Alexander Dick, Sir David Dalrymple, Mr. Alexander Monro, *Primus*, Dr. Robert Whytt, Mr. William Johnson, Mr. Alexander Wedderburn, George Clerk of Drumcrieff. 後者に Duke of Hamilton, the Earl of Glasgow, Lord Elibank, Lord Kames, George Drummond [エディンバラ市長], Colonel Oughton, Mr. Andrew Pringle, Mr. Gilbert Elliot, Alexander Tait. さらに、商人 Adam Fairholm が財務担当、廷外弁護士 (Writer to the Signet) の Patrick Duff が書記に選任された。

こうして、母体 Select Society は、1755年3月12日に、この新しい会を母体とは別組織として運用することを決定した。同年4月7日に新会の最初の月例会が開催された。会の運営は順調で、1755年4月 [もしくは5月]、Select Society の財務を担当していたヒュームは、当時ローマに滞在中のラムジニ二世に次のように書き送っている。

“It has grown to be a national concern. Young and old, noble and ignoble, witty and dull, laity and clergy — all the world are ambitious of a place amongst us, and on each occasion we are as much solicited by can-

didates as if we were to choose a member of Parliament...”

奨励金付きの懸賞は1755年の時点では決して新しい試みではなかったが、やはりまだ珍しいことに属していた。1735年にイングランドで、1例、学術文化の奨励金が設けられたし、1754年にロンドンに工業の奨励団体として、Society of Encouragement of Arts, Manufactures, and Commerce [のち Royal Society of Arts] が創設され、同様にプレミアム付きの懸賞を募集している。

エディンバラにおける新協会の試みは大成功で、数年を経ずして懸賞金の数は当初の23から142個に増大したのである。Edinburgh Society は財政を主として母体の Select Society に頼っていた。規則により、Select Society の会員はすべて Edinburgh Soc. の会員として登録され年会費を納入する義務があったし、また、だれでも年間2ギニーの維持費を納入すれば Edinburgh Soc. の会員になることができたが、逆にそれによって Select Society の会員資格が得られるわけではなかった。

Edinburgh Society も母体と同様に定期的に会合を開き、改良問題に関するさまざまなテーマを取上げて議論している。Scots Magazine の1757年3月号 (vol. 19) にこの会の討論テーマ内容が掲載された。マッケルロイはこれを唯一の記録として11テーマ全部を紹介しているが(8ないし9問題までが農業問題であるが、それでも十分に、農業改良を足場としつつ資本主義的工業化に向けて、離陸しようとしている社会の姿をかい間見ることができる)、そのうちの2、3を原文のまま再掲してみよう。

What are the advantages to the public and state from grazing? what from corn lands? and which ought to be most encouraged in this country?

What are the most proper measures for a gentleman to promote industry on his own estate?

What is the best method of getting public highways made, and repaired: whether by a turn-pike, as in many places in G. Britain? by county or parish work? by a tax? or by what other method?

What is the best and most equal way of hiring and conducting servants? and, what is the most proper method to abolish the practice of giving of vails? [vail = チップ, 心付け]

Edinburgh Society の議論は必ずしも議論のみで終わるわけではなく、社会慣習の変更や、行政的施策の促進など実践的效果を生む場合も少なくなかった。例えば従者や下婢に対する心付けの問題は、世論の組上に上り、結局この慣習は廃止された。又、ハイウェーの問題はその後も幾度となく、ハイウェー・橋梁・フェリー建設法の制定に向けて論陣を張った結果、数年後には、スコットランドの道路はイングランドと同様に舗装され、道路交通事情は飛躍的な改良を見たのであった。

協会は母体の Select Society より2年近く長く存続したが、やがて同種の性格の

公的機関である Honourable Board of Trustees for Manufactures in Scotland に道を譲った。

Edinburgh. Society for the Improvement of British Wool

1. 1791—?

[文献リスト No.68~71]

1791年に創設され、John Sinclair がもっぱらこの会を舞台に活躍した。クレス・ライブラリーとエディンバラ大学図書館で数点の文献が見付かっているが、この会の詳細については調査が及んでいない。

Edinburgh. Society of Antiquaries of Scotland, のち Royal Society of… (別名: Society of Scottish Antiquaries)

1. 1780—Royal Society, 1783+

[文献リスト No.72~77]

2. 11代ブーキャン伯爵

スコットランド文化の一般的な特質として、伝統的な懐古趣味や、古いものに対する熱烈な愛好心があげられる。しかし、啓蒙期エディンバラのリテラーティたちは、この種の好古主義には総じて熱意を抱かなかった。彼らの関心は基本的に、スコットランドの未来に対して向けられていたからである。

したがって、Society of Antiquaries in London をモデルにした好古学会の創設を、第11代ブーキャン伯 (David Stewart Erskine, 11th Earl of Buchan, 1742—1829) が口にし始めた時、エディンバラ・リテラーティ——とくに法律家たち、エディンバラ大学の教授連、Philosophical Society の会員、といった人々は、いちように、ある種の侮蔑をこめた敵対意識をもって、これを迎え入れたのである。この空気は、ブーキャン伯の反啓蒙的姿勢によって、いやが上にも倍加された。ブーキャンの方でもまた、リテラーティたちに対する反感と嫌悪の情を露骨に示した。リテラーティ対、ブーキャンを先頭とするアンティクェリストたちの対立図式が出来上がったことについては、非はより多くブーキャンにあり、その例証にこと欠かないが、ここでは割愛する。

創設プランが出来上がり、1780年11月の発会式には、リテラーティもふくめて37人の人々にブーキャンから招待状が送られた。うち、次の14人が出席したが、欠席した方にはヘンリー・アースキン、ケームズ卿、ヘールズ卿 (Sir John Dalrymple), ヒ

ュー・ブレアそしてジェームズ・ボズウェルがあった。出席者には、タイトラーとスメリーを除けば、これという著名人物はみあたらない。

Allan M'Connochie, William Tytler (Lord Woodhouselee. Alexander Fraser Tytler の父), Hugo Arnot (1749—1786), William Smellie, James Cumming, John Balfour, John Williams, John Syme, Andrew Crosbie (Poker Club. バートン版のカーライル自伝の中に、クロスビーの名前が見える), Charles Hay, Alexander Wight, William Creech (1745—1815. Printer。スメリーの共同経営者), Thomas Philips, John Donaldson.

会の活動が始まってからわずか2年後の、1782年、5月21日にブーキャンは王の許に 'Royal Charter' の請願文を發した。〔文献 No.75, 76参照〕この '暴挙' がエディンバラ中に知れわたると、エディンバラ大の教授たちを中心とするリテラーティは一斉に反撥を示し、双方の間のかねてからの対立感情は頂点に達する。1782年12月、王の下に3通の陳情文が送られ、好古協会に対して勅許状を下付しないようにと要求してきた。1通は、学長ウィリアム・ロバートソンの署名入りでエディンバラ大学から、2通目は Philosophical Society からで、ウィリアム・カレンの署名入りであった。残る1通は Advocate Library の館員たち (curators) からの反対であった。この時、ブーキャンはいみじくも、'彼らは三つの顔を持っているように見えるが、じっさいには一つだ (...have the appearance of being three...they are really one.)' と言って、この反撃がエディンバラ・リテラーティの総体から發されたものである、との認識を示した。

エディンバラ大学の反対理由は——そして後の二者もこれに従ったのだが——'好古協会にチャーターを下付することは、大学の既得權益を侵害することになる。大学側としては、学問・文化のすべての領域にわたる広汎な學術組織がより好ましいと考えている' と言って、ここに初めて Royal Society of Edinburgh の構想を表明する。ブーキャン側も負けじと、論戦を展開する中で、鋭い皮肉をこめて一矢を酬いた。"好古協会はエディンバラに2年も存在しているが、Royal Society のような素晴らしい構想があるのをついぞ知らなかった。もしかして、好古協会への反対運動にもっともらしい色付けをするために、一部の人たちが急造したプランではないのか" と。又、次のようにも言って、大学側の痛い所を衝いてきた。"好古協会は好・考古学や自然史を専門とする会だから、Royal Society の部門に加えて計画を補完しては如何か?" と。

ジョージ三世が、この争いに裁断を下したのは翌1783年3月29日、同日附を以て双方に Royal Charter を与えたのであった。闘い終わって漁夫の利を得たのは、果たして Philosophical Society であったのか、Antiquaries であったのか? あるいは、

双方であったのかもしれない。

評判の芳しくない Antiquaries ではあったが、業績は相当なものである。協会の出版物は数多く、分けてもその企画の中に、ジョン・シンクレアの、かのすぐれた業績、‘Statistical account of Scotland, 21v.’ (William Creech, 1791—99)——過去を省み、18世紀スコットランドのあらゆる成果を総括しようとした試みとして評価できる——の続編として、新しい統計調査の編集出版への協力がふくまれていたことは、やはり特筆に値するものであろう。

続編：The New statistical account of Scotland... Edinburgh & London,
1845. 15v.

Edinburgh. [Honourable] the Society of Improvers in the Knowledge of Agriculture

1. 1723—1745 (?)

[文献リスト No. 78~80]

2. Duke of Athole

“農業知識改良者協会”は、大ブリテン島全体を通してもっとも早く設置された農業団体である。又、農業改良にもっとも成功した団体でもあり、以後創設された多くの改良団体のモデルとなった。1723年6月8日、アッソール公爵の発意で創設された。創設メンバーは、Duke of Hamilton, Earl of Stair, Earl of Hopeton, Earl of Ilay, Lord Cathcart, Sir John Dalrymple, Mr. Hope of Rankeilior [i.e. Thomas Hope]。

トマス・ホープは生涯、土地改良に一方ならぬ力を傾け、‘Hope of Rankeilior’と言われたが、詩人の Allan Ramsay [Select Society を創った画家ラムジイの父] が、この新生協会に捧げる詩を作り、ホープを讃えている。当時ホープはエディンバラ市からストレイトン湖 (Straiton's Loch) を賃借して干拓し、“…かつて沼沢地であった処を…籬を作り、樹木を植えて、肥沃な牧草地と心地よい逍遙の地となし、紳士淑女の憩の場”となしたのである。

20年後に、Robert Maxwell が、改良者協会の “Select transactions” [文献 No. 79] の刊行準備を始める頃には協会員数は300名を数えるほどになった。名簿中には1707年の “Union” 条約締結にあたって委員を命ぜられた者が8名もいたし、公爵が3人、侯爵2人、伯爵21人、子爵1人、卿23人、ナイト爵45人、民事裁判所長2人 (Lord Presidents of the Session)、高等法院書記1人 (Lord Justice Clerk)、民事裁判所主任書記4人 (Principal Clerks of Session)、大蔵卿2人 (Barons of the Exchequer)、

高等法院評議員11 (Senators of the College of Justice), エディンバラ市長〔経験者〕3, といった具合に延々と続いて最後に上級弁護士50人, 廷外弁護士10人, …医学博士7人, 書店主2人, 商人3, 園丁3, 技師1などとなっている。職人や技術者は実務的な助言の提供と引き換えに自由加入を認められていた。

改良者協会の人々はたちまちにして農業改良の技術を発展させ、完全なものにした。やがてスコットランド中を改良熱が席卷したが、品種改良, 生産性向上等, さまざまなメリットをもたらす一方で, インフレを招き借地料の高騰によって小作民の窮乏化が進んだ。

協会の活動は農業改良に留まらず, 工業の奨励とも深く結び付いて行った。1726年, スコットランド政府に工業化に関する政策提言を行ない, 翌'27年, スコットランド議会は関連二法案を可決した。一つはリネンと麻繊維工業の制限緩和, 他の一つは水産業, 製造業の奨励及び促進およびその他の改良事業に関する法案であった。後者に関わるものとして同年, イギリス政府による Board of Trustees for Encouraging Fisheries and other Improvements in Scotland が創設された。

改良者協会は1745年のジャコバイトの叛乱がきっかけとなって活動を停止するが, この会の存在を契機として, 爾後スコットランド社会のすべての分野にわたって改良ムードが高まり, 啓蒙盛期への途を切り開いたと言える。

Edinburgh. Speculative Society

1. 1764+

〔文献リスト No. 81~86〕

2. ウィリアム・クリーチ以下6名

啓蒙期に起源を持ち, その後王立学会となって現在まで存続している会については, 既にいくつか見てきたが, この会のように, 私設の協会としてなお今日まで命脈を保っているのは, 稀有の事に属する。

1764年, エディンバラ大学の6人の若い学生たちによって始められた。入会者の多くは18歳から21歳くらいの若ものたちであったが, 発会後ほどなく学生の会であることを中止した。以後, 2百数十年の星霜を生き延びて 'Old College of the University' と呼ばれる建物の一角に存在している。この場所は, かつて1769年にエディンバラ市議会の許可を得て, 彼らの元祖会員たちが最初の建物を建設した発祥の地である。当時の金額で164ポンドを要したと言う。

創設期の会員は, William Creech (1745—1815, printer) Allan Maconochie のちLord Meadowbank, Alexander Belsches, John Bruce, John Bonar [会の書

記] 及び John Mackenzie。彼らは毎週金曜日（のち、水曜日）の夕方、ヤング博士 [John Young か?] の教室で、まず講義を聴き、次いで討論を行なった。

この会の、他の啓蒙期学・協会と異なる際立った特徴は、当初から何項目かの厳しい規定を立てて厳密に会活動を律したことである。それらの項目とは、1. 会員数は15名と制限され、拡張主義を排した。2. 会の目的は文学と公的な場における演説法の2点にしばられた。3. 入会は抽選で定められる。4. 義務の強制的遵守および5. 規律違反者は容赦なく退会処分が付すること、であった。結果は、協会の人気は上昇気流に乗り、専用の建物が出来上がったことから生ずる利点と相まって、その地位を不動のものとした。

しかし当然のことながら、長期間には退潮期もあり、さまざまな原因から来る危機的状況もあった。1760年代の金融危機、フランス革命期には政治的議論を会内に持ち込むことを禁止したため、若い会員間に不人気をもたらし、1794年12月にはこの問題に関する検討委員会が出来、協会に対して：“会は当面の危機にあたって、討論テーマとして今日の政治的諸問題を取り上げることが許可すべく配慮されたい”と勧告している。革命的気分の高まりの中で、若い会員間には一触即発の兆しが充満しており、それが会の基礎を揺がせて破滅に至らせない、との保証はなかった。

この危機は、“Speculative Society の会史上、もっとも輝やかしい時期”に訪れたのである。この時期、会は、啓蒙後期の逸材のほとんどすべてを捲き込んでいた。すなわち、Francis Jeffrey, Henry Brougham, Francis Horner, John Archibald, Charles Kinnaird, James Moncreiff, Henry Cockburn, Henry Petty のち 3rd Marquis of Lansdowne (25歳で大蔵大臣になった)、そして、Walter Scott が会の書記を務めていた。ジェフリ、ブルーアム、ホーナー、キンネアド ペティ、モンクレイフら、若手会員の大部分は政治的にはウィッグである。そして争いは、これら若いウィッグ会員と、古くからの会員でトーリーの支持者であるデヴィッド・ヒューム（哲学者ヒュームの甥、エディンバラ大スコットランド法教授）、Charles Hope, Alexander Maconochie（創設会員 Allan Maconochie の息子、第二代メドーバンク卿）らとの間に起こった。

ヒュームは若いウィッグたちの姦ましい革命論義に腹を立て、彼らとフランスの革命家たちを結び付けて公けに論難した。ヒュームはひそかに彼ら若手会員たちの大学と、会の双方からの追放を目論んだのだが、ヒュームの同僚たちがこの企てに乗ってこなかったため、この計画は未然に終わった。一方、若者たちはジェフリを先頭に立ててヒュームの挑戦に応ずる構えであった。学長ウィリアム・ロバートスンが、ジェフリを喚問して‘事情聴取’しようとした時、彼は不在、ホーナーとキンネアドは病気を口実に逃げ、結局ブルーアムが一人で出向いた。しかし、ロバートスンはブルー

アムの大叔父にあたり、ブルーアムもひたすら‘恭順’の姿勢に終始したため、この件は事なきを得たのであった。

だが、二度目のトーリー対ウィッグの抗争はそうすんなりとは納まらなかったのである。“マッコノチーが会に入っているのは会の行動を大学側に通報するスパイ活動をやっているからだ”との噂がウィッグ側の耳に入り、この風評をもとに告発を受けたマッコノチーは居直って、かえって問題を増幅させたのである。彼は“彼らがこれ以上政治問題に首を突っこむのを止めないのならば、この夜の討論（1799年1月22日）を一言残らず記録した上で総会の召集を要求する。こういう議論を放置すると、大学の塙の中にジャコバン・クラブのような政治団体ができるかもしれないから、協会の自治権を返上して大学側に決着をつけてもらおう、総会で検討しようではないか”と言って脅しにかかった。ブルーアムらは、“マッコノチーは協会の名誉を著しく毀損した。協会員としての品性に悖るような、臆説に基づく行動を公言してはばからない”と激しく非難した。長期間にわたって猛烈な応酬が続いた後、ブルーアムらの決議が採択された。だが、その後に恐ろしい反動がやってきたのである。とてつもなく危険な組織「ジャコバン・クラブ」と関わりあいになることを怖れて、雪崩を打つような大量の脱会者が出たのである。Speculative の命運まさに尽きたかのような大きな危機であった。

Speculative Society を讃える言葉は多い。Speculative は疑いもなく、18世紀を通じてもっとも人口に膾炙し、成功した討論クラブ (debating society) であった。

関連文献：

[Dickson, William Kirk]: History of the Speculative Society, 1764—1904. Edinburgh, 1905.

他に200周年記念に出版された文献（1964～68年頃）があるが、書誌事項が現在のところわからない。

Edinburgh. Wernerian Natural History Society

1. 1808—1838

[文献リスト No. 87～88]

2. ロバート・ジェイムスン

Wernerian Natural History Society は1808年、Robert Jameson (1774—1854) によって創立された、啓蒙期最後の専門学会である。ジェイムソンは、John Walker の後を承けて1804年に、エディンバラ大の Natural History Museum の館長兼教授に就任、この博物館をヨーロッパを通じて五大博物館の一つに仕立て上げた人物であ

る。

Wernerian という名称は、言うまでもなく Abraham Gottlob Werner に由来している。ヴェルナーはドイツの地質学者で、地球の起源と発生理論では、原始、地球は海に被われていて、その後四段階を経て現在の陸と海に分れてきた、とする仮説をとった。ヴェルナーの仮説は19世紀を通じて支配的な影響力を持ったが、彼の弟子中、とくに Leopold von Buch や Alexander von Humboldt に強い影響を与えた。

これに対し、スコットランドでは James Hutton [Oyster Club の項参照] がいて、地球発生についての新理論を提唱した。ハットンは、現在の地質の状態を観察することから彼の分析を始め、そこから帰納的に、太古においても陸と海の分布は、現在とほぼ同じ比率で存していたに違いない、と推定した。こうした、まったく対極にあるヴェルナーとハットンの理論は、当時のほとんどすべての自然科学者を巻き込んで、18世紀スコットランドを二分する激しい論争が行なわれたのであった。

言うまでもなく、ジェームズ及びヴェルナー自然史協会はヴェルナー理論の側に立った。これに対し、Royal Society of Edinburgh に拠る自然科学者たちは‘Hutton-oriented’であったと言われる。ハットンは地質学においては、必ずしもヨーロッパの主流とは言えないが、むしろ重要なことは、彼がエディンバラ・リテレーティの中心人物の一人として、啓蒙期スコットランドの他のさまざまな分野にも大きな影響力を及ぼしたことであった。少なくとも、彼が現在の地質の分析から自らの地質学を始めたことは、土地改良、農業技術改良に打ち消し難い大きな足跡を残したのである。事実、晩年はハイランド地方の地質改良と農業問題に没頭して、一生を終わった。

関連文献：

Sweet, Jessie M.: The Wernerian Natural History Society in Edinburgh.
Freiberger Forschungshefte, Nr. 223, 1967.

Glasgow. Hunterian Museum of Glasgow University

1. 1807+ [文献リスト No. 89]
2. ウィリアム・ハンター

Hunterian Museum は啓蒙時代も末期に入った1807年に、William Hunter (1718—1783) によってグラスゴウ大学に遺贈された。

ウィリアム・ハンターは、啓蒙期の3人の著名な医学者、ウィリアム・カレン、ウィリアム・スメリー、ジェームズ・ダグラス（いずれも既出）の教えを受けた医者で

ある。ジョージ三世の妃、Queen Charlotte の侍医として何回か妃の出産を看取った。1768年、ロンドンの Great Windmill Street に居を構え、ここに劇場兼講義室、解剖室、博物館（室）を併設した。1783年に亡くなるまで、この邸宅に住み、講義をしたり、解剖をしたり、標本類や準備材の収集等に打ち込んで余生を送った。

収集は多岐にわたり、質量共にすぐれたものとなった。相当な量の絵画、版画、銅版、貨幣、メダル、宝石類、鉱石、貝類やサンゴ、化石、鳥の剥製類、昆虫、植物その他自然史の標本、解剖学、病理学の準備材（Preparations）及び1万冊を超える書物と写本、稿本である。これらの収集物一切と共に、建物の建築費として8,000ポンドが大学に寄贈されたのである。

博物館の収蔵品は、グラスゴウの学生や市民たちにきわめて有用であったが、とくに、エディンバラにほとんど一世紀近く遅れて開花しつつあった医学と、自然史の教育にとっては無限の宝庫となった。収蔵品中の書物とマニュスクリプトは、のちにグラスゴウ大学図書館貴重書部門のコア・ボックスとなり、その名も Hunterian Library と名付けられている。

Glasgow. Literary Society of Glasgow

1. 1752—ca. 1778

〔文献リスト No. 90～91〕

2. アダム・スミスら12名

Literary Society of Glasgow は、グラスゴウで二番目に誕生した協会である。1743年立の Political Economy Club に遅れること10年、1752年、1月10日に最初の会合を開いた。Literary Society もまた、18世紀スコットランドを通じてみても、明らかにもっとも重要なクラブの一つである。名称にかかわらず、カヴァーする範囲が広いという点では、エディンバラの Philosophical Society と共通するところがあるが、経済的問題についてはより大きな関心を寄せていたと言えよう。

初日に集まった創設メンバーは12名、9人までが College of Glasgow [のち University] の教授である。James Moor (ギリシャ語教授), Robert Hamilton (人文学), [William] Leechman (神学), James Clow (論理学), Hercules Lindsay (法学), R. Dick 博士 (自然哲学), George Ross (人文学), William Cullen 博士 (医学), Adam Smith (道徳哲学), Craig 師 (グラスゴウの牧師), Richard Betham 及び John Brisbane 博士。

やがて、会員の一人がペーパーを提出し、それを読んで批評し合う、というルールが確立するが、それまでの繋ぎとして新刊本の内容紹介と書評が行われた。1月16日

の会では、カレンがモーペルシャス (Maupertius) の“宇宙論” (Essai de Cosmologie) を書評し、次の23日にはスミスが、ヒュームの“商業論” (Essays on Commerce) を紹介した。新ルールの下での最初の例会は2月7日、ムーアが“On historical composition”というタイトルのペーパーを提出している。

次の2年間に会員は31名に達した。デヴィッド・ヒュームがこの間に加入してきた。例会に提出されるペーパーの内容はますます多彩になり、それをめぐって、自由闊達な討論が展開された。24歳のデュガルド・ステュワートが、会の議事録を読んで刺戟を受け、入会を申し込んだのは1777年3月7日。その時彼が是非読ませて欲しいと持ちこんだペーパーは、“睡眠中の精神状態と夢現象について” (On the State of Mind in Sleep and the Phenomenon of Dreaming) と題する精神分析学のような論文であった。

会員はさらに増大して、トマス・リード、ジェームズ・ブラック、[ジェームズ・] アンダスン、Dr. Wilson, Dr. Irvine, Mr. Muirhead, Mr. Arthur ら〔詳細不明〕が加入してきた。会は、商人たちにも開放されたので、著名な印刷業を営む Robert and Andrew Foulis 父子も入会した。会員間には、階層や職業による差別は一切無かったようにみえる。1764年、11月9日の会合でロバート・フーリスは“Memoir on the Discovery and Culture of Genius”について報告し、アンドルーの方は、12月14日の例会で、“On the First Religion of Mankind and the Notion of Chaos”というテーマで報告している。

1764年までは会は順調に推移したが、この年の終わりに運営上の最初の蹉跌が生じた。それはウィルソンの報告をめぐって起こった。12月21日にペーパーを提出するはずだったウィルソンが欠席し、次週28日には参会者があまりに少なかったため、又もや流会となった。このことがきっかけとなって罰金制度が採り入れられた。遅刻、欠席の繰返し（続けて4回欠席すると退会処分）、予定されたペーパーを提出しなかった時、前回例会に、次回に報告するタイトルを予告しなかった時、前の週に次の討論テーマを提出しなかった時、いずれの場合にも罰金が適用されたのである。罰金制度は時として官僚的に過ぎるほど厳格に運用され、書記さえこれを免かれることが出来なかった。毎年11月の最初の例会に、集会場所から1マイル四方に住む会員は半ギニー金貨1枚の供託金を求められ、もし予定されたペーパーの提出を怠った時は、没収されたのである。

これほど厳格に運用しても、クリスマスに入り大晦日が近くなると、きまって会紀が乱れ、たとえ罰金を取られても欠席する会員が増えてきた。そしてついに、1778年の12月25日がやって来た (Literary Society の公式記録はこの日で終わっている〔文献 No. 91〕)。席上次回を2週間先に延期しようという動議が出され、リード、アー

ヴィン、アンダスン、アーサーら会則遵守の少数派が強硬に反対したにもかかわらず、賛成多数で可決された。本来ならば翌 '79年1月1日が報告予定日であった、アーサーは、スコットランド人気質を遺憾なく発揮した。是が非でも協会規則を守るのだと頑張って、書記にも記録に留めるよう指示し、1月1日に報告を決行したのである。当日、アンダスン、リード、アーヴィン、ハミルトン (Robert), Mr. Graham [Robert Graham か?] の5人が同調出席した。次週8日は、1日の会が合法か否かをめぐって会は真二つに割れた。合法となれば当日出席しなかった者全員に罰金が処せられる。結局、会は大多数が12月25日の報告者リチャードソンを議長と認めることによって、1月1日の会を非合法と見なしたのである。(前回の報告者が次の議長を務めることに定まっていた)。アンダスンがとりなして、9項目にわたる延期反対の理由を議事録に取り入れることによって、この場は収束した。が、二度と再び会の空気が元に戻ることはなかった。この時期すでにスミスは、エディンバラに移住し(1764年外遊)、ヒュームは没していた(1776)。

その後何らの記録を留めることなく、Literary Society は消えて行った。David Murray が、18世紀末まで続いたと言っているが、証拠はない。19世紀はじめに Literary and Philosophical Society in the University of Glasgow なる会があり、Literary Society の後身ではないか、とも言われるが二つを結び付ける根拠はない。

関連文献：

グラスゴウのクラブ全般について次の文献がある。

Strang, John, 1795—1863: Glasgow and its clubs. 2nd ed., London & Glasgow, 1857.

Glasgow. Political Economy Club

1. 1743—?

[文献リストなし]

2. アンドルー・コクレイン

グラスゴウの商業活動が活潑になった結果とも言えようか、1743年に Political Economy Club が創設された。農・産業改良団体を別にすれば、啓蒙期中唯一の経済専門の学・協会である。グラスゴウの市長であった、創設者 Andrew Cochrane (1639—1777) の名を取って、別名 'Cochrane's Club' と呼ばれた。ジョン・レーの評言では、'... was probably the first political-economy club in the World.'¹⁾ と言うことになるが、1702年にやはりスコットランドで同じ事が試みられている。のちに Advocate's Library の館長になった John Spottiswoode が、スコットランド

の産物や貿易について研究するための会を組織しようとしたが、これは不発に終わった。

18世紀スコットランドが生んだ、一人の個人の著作として、後代にもっとも大きな影響を与えた著作は、言うまでもなくスミスの『国富論』である。政治経済学をはじめて科学に仕立て上げたこのスコットランド人は、Cochrane's Club のメンバーであった。スミスが加入したのは1751年、以後グラスゴウに居住した13年間を通じて会員であり続けた。その期間は当然のことながらスミスが、グラスゴウ大学の道徳哲学教授の座にあった1751年11月から1764年の1月までの期間と重なる。

Political Economy Club 及び、とくにスミスの、理論経済学に対する興味を喚起しようとする努力は、かなりの効果を収めたと思われる。会員の一人、グラスゴウの著名な印刷業者ロバート・フォーリスが、次のような感想を抱いたことをスコットが書き留めている。“...[Foulis] found it worth his while to reprint such works on economics as those of Mun [Thomas Mun], of Law [John Law], and of Gee [Joshua Gee] on Trade and Navigation, Sir William Petty's Political Arithmetic, and Sir Joshua Child on Trade.”²⁾

一方、スミスもこの会における商人たちとの交友を通じて、『国富論』の執筆に必要な情報や資料を手に入れ、商取引上の細かい実務知識を獲得したのである。スミスはこの後、グラスゴウ大学教授のポストを辞して、Duke of Buccleuch (Henry Scott, 3rd Duke of...) およびその弟 Hew Scott の家庭教師として、1764年から'66年の間ヨーロッパの旅に赴く。そして、おそらく、南仏、スイスのジュネーヴ、パリと、バックルー公爵の遊学につき添って旅を続ける間に、成熟しつつある資本主義的マニファクトゥアの現状を目撃し、つぶさに労働の分業過程を観察する機会を得たのではないかと、言われている。

しかし、スミスの後日の体験を基礎づけるものとして、Political Economy Club を舞台とする、当時の発展しつつあるスコットランド工業と活気に満ちたビジネスマンたちとの接触が、『国富論』執筆のための材料集めに十分役立つものであったことは、次のアリグザンダー・カーライルの記録によっても明らかであろう。

“Few of [the Glasgow merchants] could be called learned... yet there was a weekly club, of which a Provost Cochrane was the founder and a leading member, in which their express design was to inquire into the nature and principles of trade in all its branches, and to communicate their knowledge and views on that subject to each other. ...I became well acquainted with him [Cochrane] twenty years afterwards, when Drs. Smith and Wight [Andrew Wight か Alexander の方か?] were members of the club, ... Dr. Smith acknowledged his obligations to this gentleman's infor-

mation, when he was collecting materials for his *Wealth of Nations*; and ...”⁸⁾

Political Economy Club については公式記録がまったく残っておらず、会員名、終年等の詳細は不明である。

- 1) Rae, John: *Life of Adam Smith*. London, 1895. p.91.
- 2) Scott, William Robert: *Adam Smith as student and professor*. Glasgow, 1937. p.82.
- 3) Carlyle, Alexander: *The autobiography of Dr. Alexander Carlyle of Inveresk, 1722—1805*, ed. by John Hill Burton. London & Edinburgh, 1910. pp.81—82.

Primary Clubs and Societies in the Age of Scottish Enlightenment

—List of Printed Materials and manuscripts—

この文献目録は、本稿の「まえがき」注 4) に記した経緯によって、かねて準備しておいた関連データをリストとして作成し、先に1989年10月21日の西洋古版本研究会（於武蔵大学）で発表したものに、さらに多少の補筆訂正を加えた。収録文献の性格は、原資料とし、原則として同時代に発表された刊本あるいはマニュスクリプトである。会史、議事録、会員名簿、委員会報告、論文集成、規約・基準等の公的記録が中心になっており、公式記録がない場合に、回想録その他の二次的資料におきかえた。研究文献その他の関連文献は、必要な範囲で、各々の“解題”のあとに注記として記入してある。収録文献には、わずかな例外を除き、すべて角括弧内に所在機関を略記した。

なお、スコットランドの学・協会関係出版物書誌として通常 Terry, Matheson の目録を思いつく向きが多いと思われるが、私がチェックした限りでは、少し時期がずれていて、啓蒙期の学・協会文献の検索にはほとんど役に立たなかった。

Terry, Charles Sanford: *An index to the papers relating to Scotland ... and “A catalogue of the publications of Scottish historical and kindred clubs and societies and ... 1780—1908*. Glasgow, 1909.

Matheson については完全にずれているので省略する。

Aberdeen Philosophical Society

1. Minutes of the Philosophical Society in Aberdeen, 1758—1771. (Ms.)
[AUL]
2. Transactions of ... Vol. 1—5. 1830—1884. [Widener; NLS; AUL]

Edinburgh. Aesculapian Society, *later* Harveian Society

3. Carminum rariorum macaronicorum delectus: ... [Ed. by Andrew Duncan]
Edinburgi, 1813. [Widener; NLS]
4. History of the Aesculapian Club, instituted 1773. [Edin.] n. d.
[EUL; NLS (copy)]
5. Records of the "Aesculapian", with supplement to 1906. [By J. S., i. e.
John Smith, Secretary]. Edin., Pr. 1888 (1906) [EUL]

Edinburgh. Belles Lettres Society

6. Notes and speeches on questions debated in the Belles Lettres Society.
[Written by William Lothian]. (Ms.) [NLS]
7. Proceedings, 1759—61. (MS.) [NLS]

Edinburgh. Botanical Garden, *afterwards* Royal Botanic Garden

8. Catalogus arborum et fructicum in Horto Edinensi crescentium. Anno
1778. Edinburgi, 1778. [EUL]
9. Index stirpium officinalium ut in Horto Regio Botanico Edinburgensi,
numero unicuique Juxta apposito, designantur. [Edin., ca. 1780]
[NLS]

Edinburgh. Friday-Club

10. List of the members of the Friday-Club. [Edinb., 1805] [NLS]
11. Cockburn, Henry Thomas, 1779—1854: An account of the Friday Club,
written by Lord Cockburn, together with notes on certain other social
clubs in Edinburgh. Edinburgh, 1910 (The Book of the old Edin-
burgh club, vol. 3 [ed. by] Harry Archibold Cockburn) 初版は1908.

Edinburgh. Highland Society of Scotland, *afterwards* Highland and Agritural
Society of Scotland

See Edinburgh. Royal Highland and Agricultural
Society of Scotland

Edinburgh. Juridical Society

12. Case proposed by W. Buchan. For the discussion of the Juridical Society
upon Monday the 17th June 1782. (Case -by Archibald Fletcher, respon-

- dent- Robert Bell.) [Edin., 1782] [NLS]
13. A collection of styles; or, A complete system of conveyancing, adapted to the present practice of Scotland, etc. 3 vols. Edin., 1787—94. [NLS; EUL (V. 1 only)]
- 2nd ed. 3 vols. Edin., 1811—28. [NLS]
- 4th ed. Vol. 1—2. Edin., 1855. [NLS; EUL]
- 5th ed. 3 vols. Edin., 1881—83. [NLS; EUL] 以下各版省略。
14. History of the Juridical Society of England. [Ed. by William Reid] Edin., 1875. [NLS; EUL]
15. General list of members. Edinburgh, 1822. [EUL]
16. Law cases and speculative questions for the discussion of the Juridical Society... 1822—24. Edinburgh, 1822—23. 1824/25—1842/43 [Lacks: 1830/31—31/32] [EUL]
17. Laws of the Juridical Society of Edinburgh. Edinburgh, 1797. [Cameron collection] also, 1806 ed. [EUL]
- Edinburgh. Medical Society of Edinburgh, 1731—1741 (then merged into Philosophical Society, 1742; later, Royal Society of Edinburgh, 1783 +)
- See also* under both headings
18. Medical essays and observatjons. Rev. and published by a Society in Edinburgh [i.e. the Medical Society of Edinburgh]. 5 vols. (in 6) 1733—44 [SaUL; GUL; NLS; EUL (V. 4—5 only)]
- 2nd ed. 1737 (?)—44. [EUL (V. 2—3, 5 only)]; 3rd ed. rev. & enl. 5 vols. 1747. [NLS; EUL (V. 1, 3, 5 only)]; 4th ed. rev. & enl. 5 vols. 1752 [EUL] 5th ed. 5 vols. 1771 [EUL] 以下各版省略。
19. Proposals for the regulation of a Society for improving arts and sciences, and particularly natural knowledge. [Edin., 1739] [NLS]

Edinburgh. Medical Society of Edinburgh, 1734—1777

See Edinburgh. Royal Medical Society of Edinburgh, 1778+

Edinburgh. Mirror Club. 1770—1787(?) [公式記録なし]

Edinburgh Museum of Science and Art, *afterwards* Royal Scottish Museum

20. A catalogue of a collection of plaques, medallions, vases, figures, &c., in coloured jasper and basalte: produced by Josiah Wedgewood ... at Etruria ... 1760—1795, the property of Arthur Sanderson ... exhibited at the Museum of Science and Art, Edinburgh. Edin. for private circulation, 1901. [NLS]
21. Musical Festival, 1815, Edinburgh, 28th October, 1815. Minute of the Room Committee in regard to the duties of the stewards, etc. (And Programmes, etc.) Edinburgh, 1815. [EUL]

Edinburgh, Oyster Club

[公式記録なし]

22. Sinclair, John, *Jr.*: Memoirs of the life and works of the late Right Honourable Sir John Sinclair. 1837. pp. 41—42.

Edinburgh. Philosophical Society of Edinburgh *afterwards* Royal Society of Edinburgh

See also Medical Society of Edinburgh, 1731—1741 &
Royal Society of Edinburgh

23. Essays and observations, physical and literary. Read before a society in Edinburgh & published by them. Vol. 1—3. Edinburgh, 1754—71.
Second series of essays pub. by the Society.
First series the name of the Society does not occur.

[Widener; NLS; GUL; SaUL; EUL]

- * EUL copy wrongly catalogued under the heading of Royal Medical Society. 2nd ed. 3 vols. 1770—71.

Edinburgh, Poker Club

24. 'List of the Poker Club, 1768' with note of sums paid by the members, etc., 1769. (Ms.) [NLS]
A copy is given in the account of the Club in *Book of the Old Edinburgh Club*, Vol. iii, 1910. pp. 145—54.
Proc., Vol. vi, p. 182 (f. 28)

25. Minute book of the Poker Club of Scotland, 1774—84. (Ms.) [EUL]
[Alexander Carlyle 筆]

"The first page of this manuscript contains a list of members as at 26

January 1776, and further names occur on two succeeding pages. ... This volume was presented to Edinburgh University Library in 1854 by Sir Adam Ferguson, eldest son of the Philosopher."

序文にカーライル筆の 'Account of the club prefaced to the records from 1774—1784'.

26. Notebook, containing minutes and lists of members of the Poker Club, 1776—84 (Ms.) [NLS]
"On f. 1 is a list, in the hand of Alexander Carlyle, of the members in 1776. The volume also contains 'Notes from Boswell's Life of Johnson' (f. 39), 'Notes from minutes of St. Leonard's College—beginning 1710' (f. 42)."
27. Carlyle, Alexander: The Autobiography of Dr. Alexander Carlyle of Inveresk, ed. by John Hill Burton. London & Edinburgh, 1910. pp. 439—41.

Edinburgh. Rankenian Club 公式記録なし。関連文献として次の二点がある。

28. In Scots Magazine, Vol. 33, 1771, pp. 340—344.
Wallace, George: Memoirs of Dr. Wallace [i. e. Robert Wallace]
[Robert Wallace's obituary notice by his son, George includes a short but the best account of the Rankenian Club. Robert himself was one of the most important figures in the history of the Club.]
29. [Woodhouselee, Alexander Fraser Tytler]: Memoirs of the life and writings of the honourable Henry Home of Kames. ... containing of sketches of the progress of literature and general improvement in Scotland during the greater part of the 18th century. Vol. 1—2. Edinburgh, 1807.
Appendix to Vol. 1, appendix No. VIII: A list of the Members of the Rankenian Club, furnished by George Wallace, Esq.; Advocate, one of the last surviving Members. 28に含まれているリストとおなじもの。

Edinburgh. Royal Botanic Garden.

See Edinburgh Botanical Garden

Edinburgh. Royal Highland and Agricultural Society of Scotland (Formerly Highland Society of Scotland *afterwards* Highland and Agricultural Society of Scotland, 1784—1786, then to the above 1787—)

30. An account of the cattle show and great agricultural meeting, held at Glasgow, Sept. 1828, ... Drawn up by a member of the Western Committee. 1828. [EUL]
31. Index to the first, second and third series ... from 1799 to 1865 ... under the superintendence of F. N. Menzies. Edinburgh, 1869. [EUL]
32. Highland Society of Scotland: A letter by the landholders of Scotland, to the Highland Society of Scotland Feb. 1802. Edinburgh, 1802. [NLS]
33. Letter to the founder of the Highland Society of Edinburgh. Edinburgh, 1784. [EUL]
34. [Anstie, John]: A letter to the secretary of the Bath Agricultural Society, the subject of a premium, for the improvement of British Wool. Including Observations on the report of the Highland Society, and Dr. Anderson's [i.e. James Anderson] memorials. London, 1791. [Kress]
"Anderson's memorials are included in the appendix to the Highland Society's report on Shetland wool, 1790."
35. List of members of the Highland and Agricultural Society of Scotland at 31st Jan. 1837. [Edin., 1837] その他数点あり。 [NLS]
36. Premiums offered by the Highland Society of Scotland, for experiments with salt ... [Edinburgh, 1818] [Kress]
"Paper on the uses of salt, for agricultural purposes. By the Right Hon. Sir John Sinclair, bart." p. 2—16.
37. Premiums to be given by the Highland ... for 1817. [Edinburgh, 1817] [Kress]
38. Premiums offered by the Highland Society of ... in 1821 (and 1824). Edinburgh, 1821—24. [also] 1825, 1826 (—1827), 1828, 1829. [EUL]
39. Prize essays and transactions of ... To which is prefixed an account of the institution ... of the Society, by H. [i.e., Henry] MacKenzie. [First series] Vols. 1—3. Edinburgh, 1799—1807. "V. 4—6 wanting." [EUL]
40. Prize-essays and transacdtns. New series, Vol. 1—8. Edinburgh, 1829—43.
"To Vol. 3 Bound with: Premiums offered by the Highland Society of Scotland, for promoting agriculture and internal improvement in Scotland, 1831 and 1832. 56 p.; 58 p. [EUL]

41. Proceedings of the Highland Society of Scotland regarding the military roads in North Britain. Edinburgh, 1814. [EUL]
42. Proposed regulations for the Highland Society of Edinburgh. Edinburgh, 1784. [EUL]
43. Report of the committee of the Highland ... to whom the subject of Shetland wool was referred. With an appendix, containing some papers, drawn up by Sir John Sinclair and Dr. Anderson, in reference to the said report ... Edinburgh, 1790. [EUL ; Kress ; Yale]
[Bound with: Sinclair, John, Address to the Society for Improvement of British Wool, Edinburgh, 1791.]
44. Report of the committee of the Highland ..., appointed to inquire into the nature and authenticity of the poems of Ossian ... with a copius index containing some of the principal documents on which the report is founded. Drawn up by H. [Henry] MacKenzie, etc. Edinburgh, 1805.
[Hitotsubashi, under Mackenzie ; EUL]
45. Report of the committee of the Highland ... on the expediency of seeling grain, etc., by weight. Edinburgh, 1812. [EUL]
46. Report of the committee appointed by the Highland ... to consider what is the best mode of forming institutions of the nature of savings banks, for receiving the deposits of labourers and others ... Edinburgh, 1815.
[Kress]
47. Report of the Committe of the Highland Society of Scotland as to the causes which have obstructed the operation of the Small-Still Acts. [n. p.], 1822. [EUL]
48. Report of the committee of the Highland ... on the subject of fairs and markets. [n. p.], 1829. [EUL]
49. Royal warrant for a charter incorporating the Highland Society of Scotland at Edinburgh. Edinburgh, 1787. [EUL]
50. Seed-corn. Suggestions offered by the Highland ... to its members, to country gentlemen, etc. Edinburgh, 1817. [EUL]
51. Unto the Right Hon. the Lords Commissioners of H. M. Treasury the Memorial of the Committee of Directors of the Highland Society of Scotland [relative to the improvement of wool]. Edinburgh, 1829.
[EUL]

52. Aiton, William: A treatise on the origin, qualities, and cultivation of moss
-earth, with directions for converting it into manure. Published at the
desire and under the patronage of the Highland Society. Glasgow,
1805. [Kress]
— 2nd ed. Air, 1811. [EUL]
53. Wansey, 1752?—1827: Wool encouraged without exportation; or, Practical
observations on wool and the woollen manufacture. In two parts. Pt.
1: Containing strictures on appendix no. IV to a report made by a
committee of the Highland Society, on the subject of Shetland wool.
Pt. II ... London, 1791. [Kress]
54. White, P.: Observations upon the present state of the Scotch fisheries, and
the improvement of the interior parts of the Highlands. Being an essay
on these subjects, given in to the Highland Society of Scotland ... By
P. White. Edinburgh, 1791. [Kress]

Edinburgh. Royal Medical Society (Formerly Medical Society of Edinburgh,
1734—1777) 1778+

55. Catalogue raisonne; or, Classified arrangement of the books in the Library
of the Medical Society of Edinburgh. Edin., 1837. [NLS; EUL]
56. Dissertations. By eminent members of the Royal Medical Society. Edin.,
1892 [NLS; EUL]
57. Laws of the Medical Society of Edinburgh. Edin., 1816.
[also] 1783 edition by William Smellie, Edinburgh; 1812 ed.; 1845 ed.
[NLS]
58. Oration delivered before the members of the Royal Medical ... at the
celebration of their centenary, February 17, 1837. By William B.
Carpenter, etc. Edin., 1837. [NLS]

Edinburgh. Royal Physical Society of Edinburgh 1788年に Royal charter が下
付されているが、詳細未調査。

59. Catalogus librorum in bibliotheca Societatis Physicalis Regalis Edinburgenae.
Edinburgh, 1813. [EUL]
60. Laws of the Royal Physical Society, Edinburgh, as revised by a committee
appointed 1817. Edinburgh, 1819. [EUL]

Edinburgh. Royal Scottish Museum

See Edinburgh. Museum of Science and Art

Edinburgh. Royal Society of Edinburgh

See also under Medical Society of Edinburgh, 1731—
1741 and Philosophical Society of Edinburgh

61. Calendar of Hume Mss. in the possession of the Royal Society ... by J.
Y. T. Creig and Harold Beynon, etc. Edin., 1932. [NLS]
62. Transactions of the Royal Society of Edinburgh. Vol. 1—5 + Edinburgh,
1788—1805 + スコットランド啓蒙関係としては V. 1—5 が重要。
[Widener; J. R.; NLS; EUL; SaUL; Nagoya]
- Proceedings. Vol. 1, 1832 + [Widener; EUL]
- Index to ... 1783—1888. Edinburgh, 1890. [Widener]
- “Transactions. The first four vols. are each in 3 sections: History of
the society; Papers of the Physical class; Papers of the Literary class.
The Literary class ceased to appear after Vol. 4; the ‘History’ which
appeared in V. 1—5 included the Proceedings for 1783—1803, after which
the publication of Proceedings was suspended untill Dec. 1832 when the
Society began to issue an independent series entitled Proceedings.”

Edinburgh. Select Society of Edinburgh

63. Rules and minutes, 1754—63. (Mss.) [NLS]

Edinburgh. Select Society for Promoting the Reading and Speaking of the
English Language in Scotland. [One of the two subsidiary societies from
Select Society]

64. Regulations. [Edin., 1761] [EUL]
- First appeared in Scots Magazine, XXIII, 1761. pp. 440—441.

Edinburgh Society for the Encouragement of Arts, Sciences, Manufactures &
Agriculture in Scotland. [The other subsidiary society from Select Society]

65. Premiums by the Edinburgh Society for the year M, DCC, LVII. [n. p.,
1756?] [NLS]
66. Resolutions of the Select Society for the Encouragement of Arts, Sciences,
Manufactures, and Agriculture. [March 13, 1755] [Edin., 1755]

[Widener ; NLS]

67. Rules and orders ... [1755]

[NLS]

Edinburgh. Society for the Improvement of British Wool. John Sinclair がこの会を舞台に活動した。計細は未調査。

68. Observations on the different breeds of sheep and the state of sheep-farming in some of the principal counties of England. Drawn up from a report ... to Sir J. Sinclair, Chairman of the Society ... by Messrs. Redhead, Laing and Marshall ... together with ... Remarks on the state of sheep-farming in the West Highlands (by ... K. Richardson), Description of a Cheviot sheep farm by Sir J. Sinclair), etc. Edinburgh, 1792.

[EUL]

69. Plan submitted to the public, by the Society for the Improvement of British Wool. Edinburgh, 1791.

[EUL]

70. Society for the Improvement of British Wool. [Edinburgh? 1790?]

“Caption title. Includes Observations on the advantages which the public may expect to derive, by means of the proposed association for the improvement of British wool.”

[Kress]

71. Sinclair, Sir John: Address to the Society for the Improvement of British Wool; constituted at Edinburgh, on Monday, January 31, 1791 ... 2nd ed. London, 1791.

[Kress]

Edinburgh. Society of Antiquaries of Scotland *afterwards* Royal Society of Antiquaries of Scotland (also called Society of Scottish Antiquaries)

72. Account of the Institution and progress of the Society of the Antiquaries of Scotland. By William Smellie. 2 pts. Edin., 1782—84.

[GUL ; EUL ; SaUL ; NLS]

Account of the progress of the Society, 1784—1830.

See under the title *Archaeologia Scotica*.

73. *Archaeologia Scotica*: or, Transactions of the Society of Antiquaries of Scotland. Vol. 1—5. Edinburgh, 1792—[1890]

“Vol. 1 & 2 were originally published without the title” *Archaeologia Scotica*. “Vol. 3 has an appendix containing an” Account of the progress of the Society 1784—1830, “list of members, donations, etc.”

[Widener; NLS]

See also the title Transactions of ... under the heading
of ESAS.

74. Discourse delivered by the Earl of Buchan to the Society of the Antiquaries of Scotland on the 14th November, 1787, being the seventh anniversary of its institution. [Edin., 1787] [NLS]

75. [Letter to the Lord Advocate of Scotland from the President and secretary of the Society enclosing a memorial concerning the granting of a Charter.] [Edin.] 1782. [NLS]

List of members, donations, etc.

See under the title Archaeologia Scotica.

76. To the right honourable the Lord Advocate of Scotland. Memorial for the Society of Scottish Antiquaries [concerning the granting of a Charter to the Society]. [Edin., 1783?] [NLS]

77. Transactions of ... Vol. 1—2. Edinburgh, 1792—1823.

See also the title Archaeologia Scotica under the heading
of ESAS. [EUL]

Edinburgh. Society of Improvers in the Knowledge of Agriculture in Scotland 1723—1745?

78. *Begin.* A great number of the nobility and gentry having come to a resolution to encourage the wearing of home made linen cloth, the Honourable Society for Improving in the Knowledge of Agriculture have advised the publishing of the following rules for propagation and dressing of lint and hemp, and for bleaching and whitening of linnen cloth. [Edin., 1726] [NLS]

79. Select transactions of the honourable the Society of Improvers in the Knowledge of Agriculture in Scotland. Directing the husbandry of the different soils for the most profitable purposes, and containing other directions, receipts and descriptions. Together with an account of the Society's endeavours to promote our manufactures. Edinburgh, 1743. [By Robert Maxwell] [Kress; NLS]

80. [Hope, Thomas]: A treatise concerning the manner of fallowing of ground, raising of grass-seeds, and training of lint and hemp, for the increase

and improvement of the linnen-manufactories in Scotland. Published for ... by the honourable Society for Improving in the Knowledge of Agriculture ... Edinburgh, 1724.

[Kress; NLS entry under title, and the author presumed to be Richard Bradley]

"This work has also been attributed to Robert Maxwell, Richard Bradley, and William Mackintosh."

Edinburgh. Speculative Society

81. Business of the Speculating Society, with a list of the members for the session, 1820—21; 1821—22; 1822—23. Edinburgh, 1820—22.

"Cameron Collection." [EUL]

82. General list of the members, etc. Edinburgh, 1814. "Cameron C ..." [EUL]

83. History of the Speculative Society of Edinburgh from its institution in 1764. Edinburgh, 1845. [EUL]

84. Laws of the Speculative Society of Edinburgh, instituted Nov. 1764, for ... improvement in literary composition and public speaking. Edinburgh, 1818.

Laws of the Speculating Society, instituted ... 1816. Edinburgh, 1820. "Cameron Collection." [EUL]

85. Woodhouselee, Alexander Fraser Tytler, *lord*: A discourse on truth, read by ... 1772. [On the 'Benefits and disadvantages of a Militia Force'.] (Ms.) [EUL]

86. Speculative Society, card of membership of (1770) [Ms. 3942, f. 105] について

以下、筆者注記。In NLS catalogue of Mss. Vol.2, in a group of family papers (Ms. Nos. 3942—88) titled 'Robertson [Lieut. Col. David Robertson, son of William Robertson, the Principal of Edinburgh University, 1762—93]—Macdonald papers', among the letters of the Robertsons [Ms. 3942—4], there is included as of [f. 105, 3942, 1745—76, i + 306 ff] (Ms.) [NLS]

In Ms. 2116, CH (Charters and other formal documents) is included Ticket of membership of the Speculative Society given to David Cath-

cart, 1818. (Ms.)

[NLS]

Edinburgh. Wernerian Natural History Society

87. [Attitudes of the Principal Snow Peaks visible from Kumaon reported at the Nov. 23, 1816 meeting of the Society] [London], 1817.

pp. 231—234, from *Annals of Philosophy*, Vol. 9, 1817.

[NLS]

88. Memoirs of the ... for the years ... Vol. 1—8, pt. 1; 1808—38. 8 vols. Edinburgh, 1811—1839.

[EUL ; NLS (lacks V. 8, 1838)]

Glasgow. Glasgow University. Hunterian Museum

89. Monumenta Romani Imperii, in Scotia, maxime vero inter vestigia valli, auspiciis Antonii Pii Imperatoris, a Fortha usque ad Glottam perducti, reperta, et in Academia Glasguensi adservota, iconibus expressa. [Hunterian] [n. p., n. d., [1771] Another copy: Glasgow, [1789?] [GUL]

Glasgow. Literary Society of Glasgow

90. Extracts from the Records ... are printed in Duncan's notices and documents illustrative of the literary history of Glasgow during the greater part of last century, [Glasgow] Maitland Club, 1831, p. 132, and a list of essays by Dr. James Moor. *ibid.*, p. 131. (Ms.) [NLS]

1764年までの Records の extracts で Maitland Club が刊行したものと思われる。(McElroy p. 41 にこの文献とおぼしきものが引用されているが、典拠が示されていない。)

91. Records, 1764—79, transcribed from the Society's minutes by William James Duncan. 1830. (Ms.) [GUL ; NLS, both copies]

"This would probably a copy from the original of Records, 1764—79 in the Library of Royal Faculty of Procurators, Glasgow."

McElroy p. 41 に原本が引用されており、NLS カードの注記と一致する。

Glasgow University. College Literary Society

92. Minute book, 1790—1799. (Ms.)

[GUL]

Glasgow University. Speculative Society

93. Minute book, 21 November 1784 to 15 April 1786. (Ms.)

[GUL]